宮城県文化財調査報告書第89集

天　神　山　遺　跡

昭和57年3月

宮城県教育委員会

天　神　山　遺　跡

序

「史跡のまちづくり」が推進されている岩手山町は，旧石器時代から近世まで数多くの遺跡があり、長い年月にわたって人々の生活の舞台となった自然の豊かな土地であります。とくに座散乱木遺跡をはじめとする旧石器時代の遺跡の分布とその調査の成果は、世界的な注目を集めるものとなりました。また、根岸遺跡、玉造遺跡と川北横穴群の発掘調査では、縄文時代や古代の人々の生活を復原する好資料を得ておりますし、中世における伊達政宗の岩出山城修築はあまりにも有名であります。さらに、「歴史の道」の調査と整備事業は、歴史を私達の現代生活に直接結びつける道筋を見つけだしたものとして大いに興味がもたれます。

さて、天神山遺跡は縄文時代の遺跡であり、蛭沢川の河川改修に伴なってその一部が削平されることになったため関係者間で協議のうえ発掘調査を実施したものであります。

調査の結果、縄文時代早期の遺物包含層など、この地域の先史文化の解明のうえに貴重な資料を得ました。

ここにその成果がまとめられ、発刊されることになりました。この調査記録が学術、教育上に広く活用されることを節に願っております。

最後に、この調査に当たりご協力をいただいた県土木部の関係者、岩出山町教育委員会並びに地元の方々に感謝の意を表するものであります。

昭和57年3月

宮城県教育委員会　教育長　北　村　　潮

例　　言

1．本書は、蛭沢川河川改修に伴う天神山遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査の主体者は宮城県教育委員会、宮城県鳴瀬川総合開発建設事務所である。

3．発掘調査は宮城県教育庁文化財保護課が担当し、岩出山町教育委員会の協力をいただいた。

4．石器の材質同定は、東北大学教授蟹沢聡史氏にお願いした。

5．土色は「新版標準土色帖」（小山・竹原：1973）を、土性は国際土壌学会法の基準を参照したものである。

6．本文中の第１図に使用した地図は、建設省国土地理院発行の1/50,000地形図「古川」を複製したものである。

7．整理、報告書の作成は文化財保護課が行ない、小徳晶が担当した。

8．本遺跡の調査、整理に関する諸記録、出土遺物は、宮城県教育委員会が保管している。

目　　次

Ⅰ．調査に至る経過 1
Ⅱ．遺跡の位置と環境 2
Ⅲ．調査の方法と経過 4
Ⅳ．調査の成果 8
　Ａ．南区 8
　　１．遺物包含層とその出土遺物 8
　　(1)、堆積の状況 8
　　(2)、出土遺物 8
　　ａ．土器 8
　　ｂ．石器 20
　　２．小竪穴遺構とその出土遺物 31
　　３．その他の遺構・遺物 33
　　(1)、溝状遺構 33
　　(2)、整地層 33
　　(3)、表土出土遺物 34
　Ｂ．北区 34
　　１．土壙 35
　　２．溝状遺構 36
　　３．井土跡 37
Ⅴ．考察 38
Ⅵ．まとめ 41

調査要項

遺跡所在地：宮城県玉造郡岩出山町字轟、字西御名掛

遺 跡 記 号：ＧＮ（宮城県遺跡登録番号：35003、35189）

調 査 期 間：昭和56年4月7日～5月22日

調 査 面 積：3,000㎡

発 掘 面 積：1,150㎡

調　査　員：技師　阿部　恵、手塚　均、小徳　晶

Ⅰ．調査に至る経過

天神山遺跡は玉造郡岩出山町轟地内にあり、江合川の支流、蛭沢川の右岸の丘陵及びその麓部に広がりをもつ縄文時代の遺跡である。昭和55年の分布調査の結果中世城館跡の可能性も考えられ、「宮城県遺跡地名表」及び「宮城県遺跡地図」では天神館跡としても登録してある。

宮城県教育委員会が県内の関発関係機関、市町村首長部局、及び県の関係部局に「埋蔵文化財と各種事業とのかかわり」を照会したところ、宮城県土木部長から昭和56年度において、鳴瀬川総合開発建設事務所が施工する蛭沢川河川改修事業と文化財の係り合いがある旨の回答があった。そこで、土木部監理課、河川課、鳴瀬川総合開発建設事務所と文化財保護課の間で、遺跡の保存をめぐる取り扱いについて再三にわたって協議を行なった。

蛭沢川河川改修事業は屈曲も少なく、川幅を広げて最大流量毎秒150ｔとなるよう改修し河川管理の適正を図るもので、すでに下流域は工事を完了し、遺跡の100m下流まで工事が迫っていた。また、左岸には県道があり、県道と蛭沢川の間には名所の桜並木があって、岩出山町の強い要望によってこの並木の保存が決定され、右岸の丘陵部を削平する方向で設計が進んでいたこと、河川法線を遺跡部分で急に変えるわけにいかず、当初計画を多少修正する形で、遺跡の記録保存の発掘調査を実施することになった。

丘陵部及び麓部には縄文時代の遺物の散布があり、地形的にみて、館の可能性があったので調査は地形図の作成から始めた。改修になる河川部分と削平の予定される部分を含め、西側の丘陵1,500㎡の地形図の作成を行ない、これをもとに発掘調査の方法等について検討を始めた器械の搬入、作業員の手配等準備を整え、昭和56年4月7日、グリッドの設定を行ない、4月8日から実質的な発掘調査に入った。

調査の結果、中世の遺構、遺物の検出はなく、地形的な観察からも中世城館跡とするのには今一つの決め手になる資料を得ることができなかった。しかし、縄文時代の遺構、遺物は当初の予想をうわまわり、貴重な資料を得ることができた。

以上のような経過を踏まえ、報告書を作成するに当たって天神館跡とは区別し、天神山遺跡の一部として取り扱うことにした。

Ⅱ．遺跡の位置と環境（第１図）

天神山遺跡は、玉造郡岩出山町字轟、同字西御名掛に所在し、国鉄陸羽東線岩出山駅から南へ約1.5㎞の地点、中新田町へ通じる県道（羽後街道）の西側に位置する。

宮城県の北西部には、奥羽山脈から派生した丘陵が連なり、その間を縫って江合川がほぼ南東方向に流れている。江合川をはさんで西にあるのが玉造丘陵、東が築館丘陵である。岩出山町は、この江合川の中流域にあたり、ここで両丘陵は枝状の末端都を形成している。

天神山遺跡は、玉造丘陵の丘陵端の１つに立地し、標高は最も高い所で約79㎡である。遺跡の東側は、数箇所で平坦部あるいは段状を呈しながら、江合川の支流である蛭沢川に向って急傾斜した地形となっている。今回調査したのは、この東端部分で、標高は約55～65㎡、蛭沢川との比高差は約８～18㎡である。現状は山林となっている。

本遺跡は、以前から縄文時代前・中・晩期の土器及び平安時代の土師器を出土する複合遺跡として知られていたものであったが（興野・遠藤：1970）、その後の分布調査により、平坦部等の状況から館跡としての可能性も指適された（宮教委：1981）。

天神山遺跡の週辺、特に蛭沢川に沿った丘陵上には、次のような遺跡がある（宮教委：1981）。

旧石器時代の遺跡としては、岩出山城跡内の城山A・B遺跡のほか、木通沢遺跡、曲田裏遺跡、丸山遺跡、南山遺跡などがある。これらの遺跡からは、主に、石刃、ナイフ形石器、スクレイパー、彫刻刀形石器など、後期旧石器時代の遺物が採集されている（藤村：1981）。

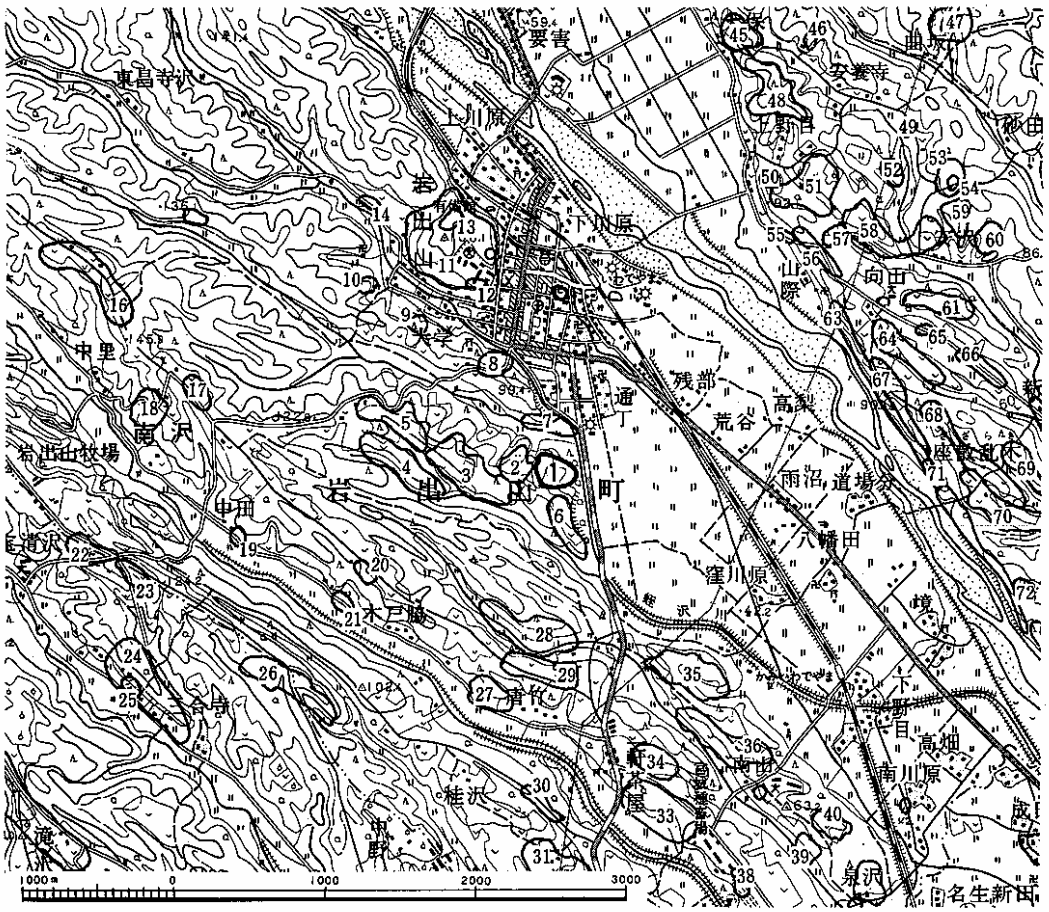
縄文時代の遺跡としては、天神山遺跡に隣接して、岩の上遺跡、ヘッピリ坂遺跡、向金沢遺跡があり、ほかに、神明社遺跡、丹波谷地遺跡、上の窪遺跡、軽石山遺跡、茅野遺跡、神道塚遺跡、合戦原遺跡などが知られている。このうち岩の上遺跡からは。早・前・中・晩期の土器ヘッピリ坂遺跡からは、中・晩期の土器、石器、向金沢遺跡からは、早～晩期の土器、石鏃などがそれぞれ採集されている（興野・遠藤：1970）。

弥生時代の遺跡としては、同じく岩の上遺跡、ヘッピリ坂遺跡、向金沢遺跡、丹波谷地遺跡、上の窪遺跡、茅野遺跡、神道塚遺跡があり、主に弥生時代後期の土器を出土する。

古墳時代の遺跡としては、南沢古墳、二軒茶屋古墳、丸山古墳、岩の上横穴古墳群などが知られている。

奈良～平安時代の遺跡としては、軽石山遺跡の窯跡、合戦原窯跡のほか上述した遺跡のほとんどが該当し、須恵器、土師器などが採集されている。

中世～近世の遺跡としては、岩出山城跡をはじめとする伊達氏関係の旧跡、丸山館跡、南沢館跡などがあげられる。これらについては、「仙台領内古城・館第三巻」（紫桃：1973）に詳しい。



第１図　遺跡の位置と週辺の遺跡

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	天神山遺跡	19	中田遺跡	37	西大崎小学校遺跡	55	大坂B遺跡
2	ヘッピリ坂遺跡	20	木戸脇裏C遺跡	38	南沢古墳	56	逢坂方墳群
3	向金沢遺跡	21	木戸脇裏B遺跡	39	泉山遺跡	57	大平遺跡
4	丹波谷地遺跡	22	岩出山牧場遺跡	40	南山遺跡	58	安沢遺跡
5	上の窪遺跡	23	龍原遺跡	41	泉沢館跡	59	高間館遺跡
6	岩の上遺跡	24	多田川遺跡	42	大下遺跡	60	安沢館跡
7	神明社遺跡	25	田憧院跡	43	宮田天神遺跡	61	向山A遺跡
8	伊達家霊廟	26	原遺跡	44	来迎寺板碑	62	自口遺跡
9	大学町遺跡	27	南沢館跡	45	膳館跡	63	川北横穴古墳群
10	蛭沢遺跡	28	茅野遺跡	46	安養寺跡	64	戦切壇遺跡
11	岩出山城址	29	神道塚遺跡	47	曲坂遺跡	65	向山C遺跡
12	城山A遺跡	30	原遺跡	48	安養寺方墳群	66	向山B遺跡
13	城山B遺跡	31	下桂沢遺跡	49	如加里B遺跡	67	座散乱木方墳群
14	下東昌寺沢遺跡	32	竜ノ沢遺跡	50	大平西遺跡	68	座散乱木遺跡
15	東昌寺沢遺跡	33	二ッ檀遺跡	51	大山庵遺跡	69	村山遺跡
16	木通沢遺跡	34	南原遺跡	52	奴加里遺跡	70	抑口遺跡
17	木通沢B遺跡	35	丸山館跡	53	高間館跡	71	中館・陣館跡
18	中田裏遺跡	36	丸山遺跡	54	高間館B遺跡	72	松森古墳群

以上のように天神山遺跡の周辺には、旧石器時代以降、各期にわたって多数の複合遺跡が存在している。そして、これらの遺跡は、その立地や出土遺物、年代において本遺跡と密接な関係をもつものと考えられる。

Ⅲ. 調査の方法と経過

今回の調査は、蛭沢川の河川改修にかかわる東端部分約3,000㎡を対象として実施した。

調査区には、磁北にそって南北の軸線を定め、それに直交する東西の軸線を設けた。これらの軸線を基準に３×３ｍのグリッドを設定し、グリッド名は、南北方向にアルファベット、東西方向に算用数字を用いて表わした。

調査区の中央には尾根状に張り出した部分があり、これをはさんで南北にそれぞれ平坦な地形が認められた。この張り出しの頂部および、南北２つの平坦部（南区、北区とする。以下同じ）について発掘調査を行い、南北両区からそれぞれ遺構、遺物を検出した。また、張り出しの頂部付近では、表土の下に地山層が確認されただけであった。最終的な発掘面積は1,150㎡である。

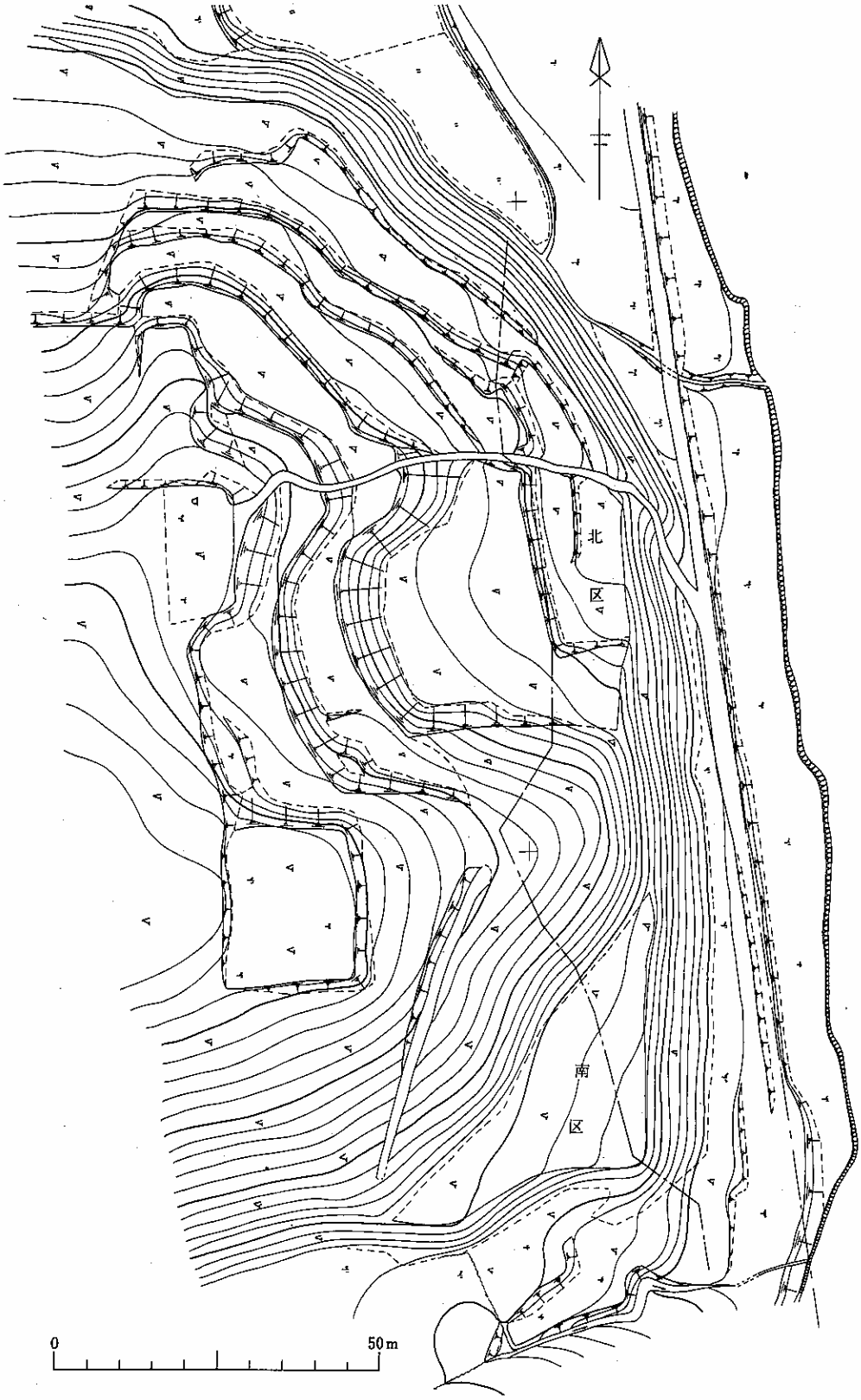
発掘調査は昭和50年7月に開始した。経過は次のとおりである。

〔南区〕

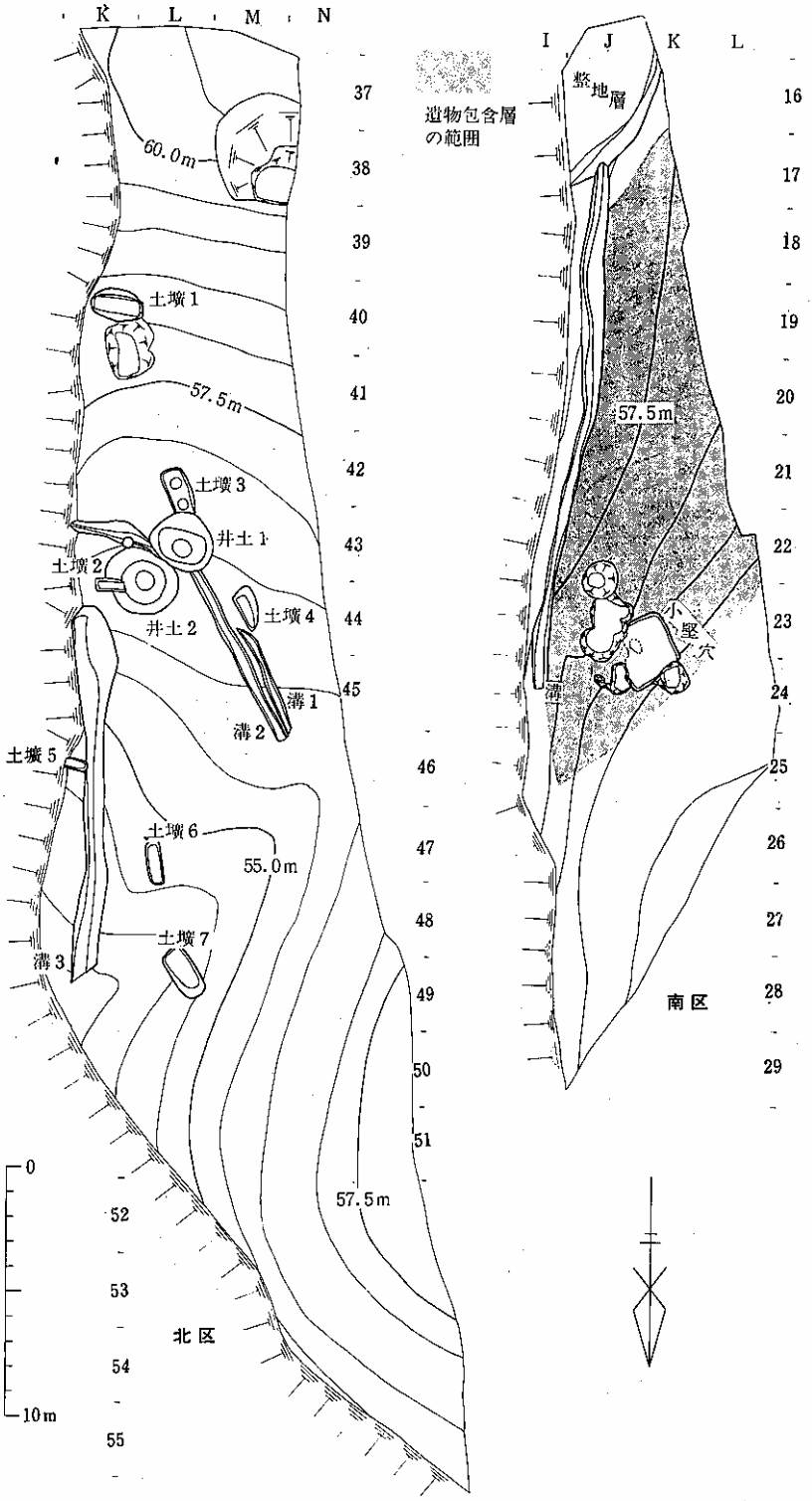
まず最初に、各グリッドの一画を１×２ｍの範囲で試掘したところ、表土の下から縄文土器を含む厚さ30～50㎝の黒褐色の土層が発見された。そこで、グリッドのＫ、Ｊおよび21・22の間のラインに沿ってベルトを残し、南区全体の表土を排除して、黒褐色土層の範囲をさぐった。そして、この黒褐色土層が南区の南端と北端をのぞいてほぼ全域に広がる縄文時代の遺物包含層であることを確認した。また南端には褐色土を主体とする整地があること、北端は表土のすぐ下に、火砕流と考えられている明黄褐色の地山が出現することを確認した。

次に、遺物包含層を分層的に堀り下げた。その結果、遺物包含層は５つの層に細別され、それぞれ縄文土器、石器を含んでおり、深さ30～100㎝で漸移層を経て地山に達することがわかった。

遺物包含層を堀り下げて行く段階でＫ－23､24区から平面形が方形の小竪穴遺構１基が検出された。また、地山上面において調査区東端部を南北に走る溝状遺構１条が確認された。遺構の精査・実測は遺物包含層の発掘に対応して行なった。小竪穴遺構に関しては簡易遣り方を設定し、スケール1/20で平面実測を行ない、溝状遺構および発掘区の地形については平板測量を用いて平面図を作成した。



第２図　遺跡地形図と調査区


K
L
M
N
I
J
K
L
遺物包含層
の範囲
盛地層
60.0m
57.5m
55.0m
57.5m
57.5m
土壙1
土壙2
土壙3
土壙4
土壙5
土壙6
土壙7
井土1
井土2
溝1
溝2
溝3
小堅穴
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
0
10m
北区
南区

第3図　遺構配図

〔北区〕

北区では、表土の下に旧表土と思われる黒褐色の土層が確認された。この黒褐色土層の中に遺物はなく、また、土層上面での遺構確認が困難だったのでこれを堀り下げることにした。黒褐土層は、北区の中央部北よりに認められた沢状に低くなっている部分を除き、深さ30～50㎝で明黄褐色の地山に達し、その地山面で遺構が確認できた。遺構は土壙７基、溝３条、井戸２基で、各々の精査・実測は南区の発堀と並行して行なった。遺構および発掘区の地形に関しては、平板測量を用いて平面図を作成した。

以上のように発掘調査は進められ、5月22日をもってすべて終了した。

Ⅳ．調査の成果（第３図）

Ａ．南区

１．遺物包含層とその出土遺物

（１）．堆積の状況（第４図）

遺物包含層は南区の表土下から検出された。範囲はＪ～Ｌ－17～24区におよび、東端部分を溝状遺構に切られている。層は基盤にそって北→南、西→東方向にゆるやかに傾斜して堆積しており、厚さはＪ～Ｋ－20～21区付近で最も厚く、約1.1㎜ある。堆積層は４枚に細分され、各層の分布範囲はほぼ均一である。以下、各層の状況について述べてみたい。

（Ⅰ層）

シルトで構成されている層で、色調は黒色（7.5ＹＲ$^{2}/_{1}$）である。木根による攪乱がおよんでおり、Ｊ～Ｋ－23区以北で特に著しい。層の厚さは約15～30㎝である。粗い砂粒を多量に含んでおり粘性は弱い。縄文土器、石器が出土している。

（Ⅱ層）

シルトで構成されている層で、色調は黒褐色（7.5ＹＲ$^{3}/_{1}$）である。部分的に木根による攪乱がおよんでいる。層の厚さは約15～30㎝である。Ⅰ層より粘性が強い。縄文土器、石器が出土している。

（Ⅲ層）

砂質シルトで構成されている層で、色調は黒褐色（7.5ＹＲ$^{2}/_{2}$）である。南側はＪ～Ｋ－18区付近で自然消滅しており、また北側ではＪ～Ｋ－23区において小竪穴遺構に切られている。層の厚さは15～45㎝である。粘性は強くしまりのある層である。縄文土器、石器が多量に出土している。

（Ⅳ層）

砂質シルトで構成され、色調は黒褐色（7.5ＹＲ$^{2}/_{2}$）である。明黄褐色（10ＹＲ$^{7}/_{6}$）の地山粒を部分的に含む漸移層で、厚さは15～25㎝である。層の上面から縄文土器が僅かに出土している。

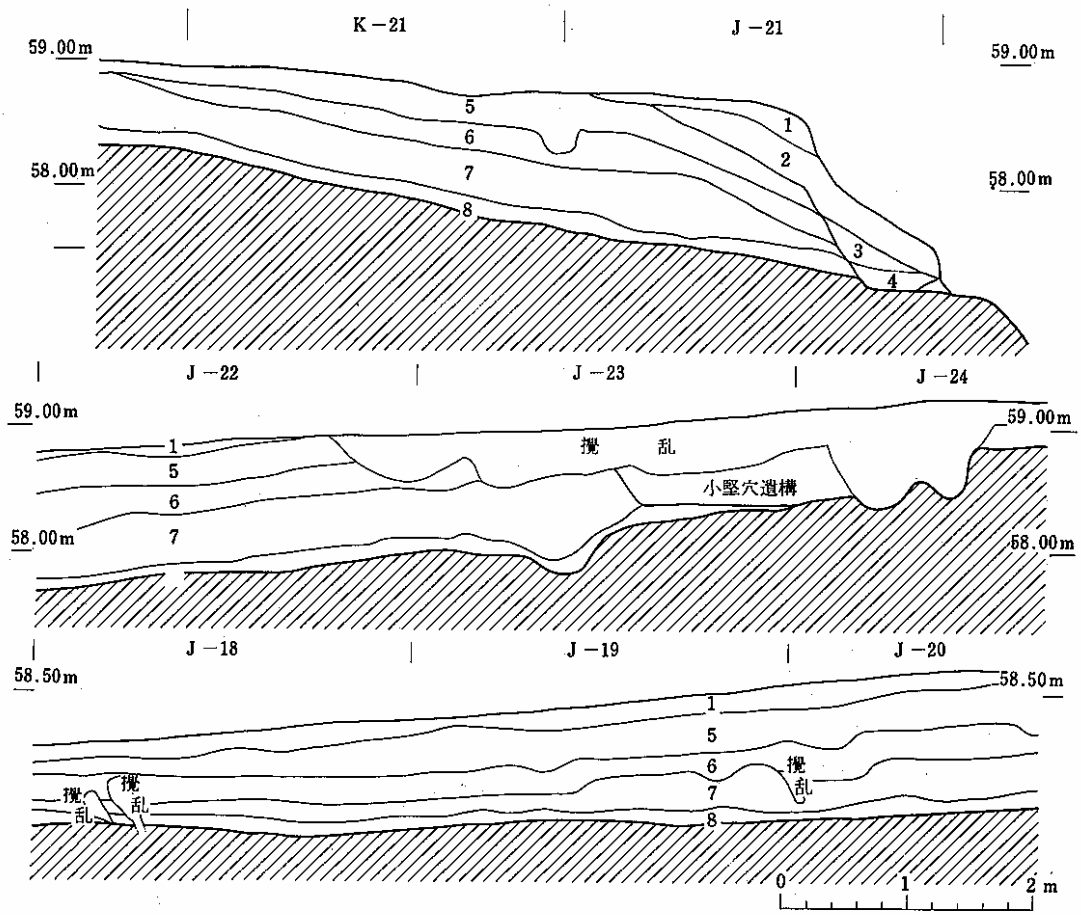
（２）出土遺物

ａ．縄文土器（第５図～10図、第１表・２表）

縄文土器は最も出土量が多かった。しかし完形品はなく、口縁部、底部資料も少ない。このため、少数の口縁部、底部資料と特徴的な文様をもつ胴部資料を包括して以下の観察を行なった。

まず、土器の胎土、内・外面の文様および文様要素について観察を行なった。その結果、遺物包含層出土の土器は、

第Ⅰ類土器――いわゆる貝殻沈線文土器



層No.	土色	土性	備考	層No.	土色	土性	備考
1	暗褐色 (7.5 YR3/3)	シルト	表土	5	黒色 (7.5 YR2/1)	シルト	遺物包含層第Ⅰ層
2	極暗褐色 (7.5 YR2/3)	シルト	表土	6	黒褐色 (7.5 YR3/1)	シルト	遺物包含層第Ⅱ層
3	黒褐色 (7.5 YR2/2)	シルト	溝堆積土第1層	7	黒褐色 (7.5 YR2/2)	砂質シルト	遺物包含層第Ⅲ層
4	黒褐色 (7.5 YR3/3)	シルト	溝堆積土第2層	8	黒褐色 (7.5 YR2/2)	砂質シルト	遺物包含層第Ⅳ層

第４図　　遺物包含層断面図

第Ⅱ類土器――いわゆる条痕文土器

第Ⅲ類土器――いわゆる縄文条痕土器

第Ⅳ類土器――縄文が施され、条痕文を持たない土器

の４類に大別された。さらに各群は、文様の施文部位、文様要素などによって細別できる。以下、図示資料をもとに各群の細別とその特徴について述べて見たい。

第Ⅰ類土器（６図１～３、９）

いわゆる貝殻沈線文土器で、胎土には繊維を含んでいない。１、２は貝殻腹縁刺突文が施される。３は極めて細い軸に撚紐を巻きつけた絡条体の圧痕を隆帯上に持ち、その下に沈線文が施文される。９は竹管の角を用いて二段の連続刺突を行ない、中間を隆線のように表現している。

第Ⅱ類（第５図１、第６図11～21、23～25、30～39、第７図41～48、56～58、71～73、第８図74～79）

いわゆる条痕文土器で、胎土に繊維を含んでおり、土器の内面、外面にサルボウやバイガイなどを用いた貝殻条痕文を持つ。文様要素およびその施文技法などによって１～４類に細別される。文様要素は以下のとおりである。１．貝殻腹縁刺突文。２．沈線文。３．刺突文。４．沈線文＋刺突文。

Ⅱ１類（第６図11～14）

口縁部文様体と胴部の境界に貼り付けされた隆帯をもち、その上に貝殻腹縁刺突文が等間隔で配される。刺突文はⅠ類に見られるものとは異なり、腹縁を斜方向から押しつけるようにして刺突したものである。

Ⅱ２類（第６図15～21、23・24）

口縁部がわずかに外傾し、口唇部は内削ぎ状を呈す。口縁部以下には棒状工具あるいは半截竹管による太形の沈線文が施される。15～18は同一個体で太く深い沈線が数条のまとまりを持って縦位、横位に施文される。沈線が押し引き状の刺突文のようになっている部分（16）も見られる。19～21、23、24は同一個体で、口唇部の頂に刻目を持ち、浅い沈線が横位、斜位に施文される。

Ⅱ３類（第５図１、第６図25～39）

口縁部文様帯と胴部の境界に稜線もしくは貼付された隆帯を持ち、その上に棒状工具あるいは半截竹管の先端部を用いた刺突文が等間隔で配される。第５図１は、口縁部がわずかに外傾し、口唇部は円頭状を呈す。口唇部には刻目が配され、口縁部にも刺突文が施される。25は口縁部が直立し、口唇部は角頭状を呈す。

Ⅱ４類（第７図41～48）

沈線文および刺突文によって文様が区画、構成される。41、42は口縁部がわずかに外傾し、口唇部は内削ぎ状を呈す。43は口縁部が外傾し口唇部が円頭状を呈す。44、45、46は同一個体で口縁部が直立し、角頭状の口唇部を持ち波状口縁を呈する。いずれも口唇部に刻目を持ち、沈線によって区画された箇所に刺突文が充塡される。45のように口縁部に縦位の隆帯を持ち、その上に刺突文が配される部分も見られる。47は沈線および円形竹管文で、48は二条の沈線によって形成された細隆起線で文様が区画され、刺突文が充塡されている。

第７図56～58、71～73、第８図74～79は条痕文土器と判別できるが、条痕文以外の文様要素

が不明もしくは無いものである。73～76は同一個体で口縁部がわずかに外傾し、口唇部は角頭状を呈する。口唇部に刻目が配されるほかは、条痕文のみ有する土器で他の文様要素を持たないものである。

第６図４～８、10、22、26～29、第７図40、49～55、59～70は、胴部以下の文様が不明のため、条痕文土器か縄文条痕土器か判別し難いものである。

４、７、26、29、65は口縁部がわずかに外傾し、口唇部は角頭状を呈す。8、50は口縁部が外傾し、口唇部が内削ぎ状を呈す。22、55、59～61、66～69は口縁部が外反し口唇部が角頭状を呈す。28、62～64は口縁部が外傾し、口唇部が円頭状を呈す。70は口縁部が外傾し、口唇部が外削ぎ状を呈す。口唇部に刻目が配されるものが多く見られる。

文様要素として７、８、26～29、40、52には刺突文が配される。４～６、22には細形の沈線文が施される。10、49、50は沈線と刺突によって文様が構成される。51、53は撚糸圧痕文を有する。54、55は口縁部に絡条体がX字状に側面圧痕され、その下に絡条体あるいは指頭による圧痕が施される。

第III類土器（第５図２～４、第８図80～88、第９図89～117）

いわゆる縄文条痕土器で胎土に繊維を含んでいる。土器外面には縄文、条痕文が施されるが内面に条痕文のみ有するものをIIIA類、縄文および条痕文を有するものをIIIB類とする。

IIIA類（第５図２、３、第８図80～88、第９図89～110、117）

外面に斜縄文が施されるものをIIIA１類、撚糸文が施されるものをIIIA２類とする。

IIIA１類（第５図２、３、第８図80～88、第９図89～110）

外面に斜縄文、内面に条痕文が施される土器で口縁部文様帯およびその文様によって、ａ、ｂに細別される。

IIIA１ａ類（第５図２、３、第８図80～88、第９図95、96）

口縁部文様帯が胴部文様帯と区別され、口縁部文様帯に縄文の施されない土器である。80～83は同一個体で、口縁部が外反し口唇部は角頭状を呈す。口唇部には、貝殻の腹縁による刻目が配され、口縁部文様帯に馬蹄形の撚糸圧痕文が等間隔で施される。第５図２、および第８図84～87は同一個体で、口縁部がわずかに外反し、口唇部は角頭状を呈す。口縁部文様帯と胴部の境界に貼りつけされた隆帯を持ち、その上に馬蹄形の撚糸圧痕文が配される。口唇部および胴部には縄文ＲＬが施される。88も類似の土器で、口唇部および隆帯上に横位の撚糸圧痕を持つ。第５図３は、口縁部が外反し、口唇部が角頭状を呈す。口縁部に貼りつけされた隆帯を持ち、その上に絡条体が等間隔で圧痕される。また、口唇部にも同様に絡条体圧痕が配される。95、96は隆帯上に撚糸圧痕を持つ。

ⅢＡ１ｂ類（第９図89～94）

口縁部まで縄文が施される土器である。89、93、94は口縁部が外傾し口唇部が角頭状を呈す。90、91、92は口縁部が外反し、口唇部が角頭状を呈す。90、92の口唇部には撚糸圧痕が施されている。

第９図97～110は、ⅢＡ１類に含められるが、胴部の破片であるため細別が困難なものである。施文される縄文は多様である。97～100は同一個体で、太くて撚りの弱いＬＲ原体を回転させている。101は０段多条のＬＲが交差するように施文されている。102、104、109はＲＬの回転方向を変えて施文している。103、108はＲＬ、105はＬＲＬ、106はＲ、107、110はＬＲが、それぞれ施文されている。

ⅢＡ２類（第９図117）

外面に撚糸文、内面に条痕文が施されている。出土例はこの１片だけである。

ⅢＢ類（第５図４、第９図111～116）

土器外面に縄文、条痕文、内面に縄文、条痕文が施される土器である。

第５図４では口縁部が外反し、口唇部が角頭状を呈す。口縁部文様帯と胴部の境界に貼りつけされた隆帯を持ち、その上に絡条体圧痕が等間隔で配される。口唇部にも同様の絡条体圧痕文が施される。111も類似の土器である。113は口線部が外反し、口唇部は角頭状を呈す。口縁部に２条の横位沈線を持つが上部の沈線によって区別された口唇部外面には縄文が施されない。口唇部の上面に絡条体圧痕が配される。

第Ⅳ類土器（第９図118，第119～160）

縄文が施され、条痕文を持たない土器で胎土に繊維を含んでいる。土器内面に縄文が施文されるものをⅣＡ類、内面が無文のものをⅣＢ類とする。

ⅣＡ類（第９図118，第10図119，120）

土器の内・外面に縄文が施文される土器である。口縁部が外反し、口唇部は簿手で角頭状を呈する。118は波状口縁を持つ。119はは部に刻目が配され、口縁部以下にはには０段多条のＬＲ、ＲＬを用いた羽状縄文が施される。

ⅣＢ類（第10図121～160）

内面が無文の土器で、外面に縄文が施されるものをⅣＢ１類、撚糸文が施されるものをⅣＢ２類とする。

ⅣＢ１類（第10図121，123～125，127～129，133～122）

土器外面に縄文が施される土器である。121は口縁部が外反し、口唇部が角頭状を呈す。口唇部上面に撚糸圧痕が配され、口縁部以下にはＬＲ、ＲＬを用いた羽状縄文が施される。口唇部外

面には縄文が施文されない。123、124は同一個体で、口縁部が外反し、口唇部が円頭状を呈す。口唇部は折返し状に肥厚し、外面に刻目が配される。口縁部以下には０段多条のＬＲ、ＲＬを用いた羽状縄文が方向を変えて施されている。125は口縁部が外反し、口唇部が円頭状を呈す。口唇部上面および口縁部に、縄文ＲＬが施される。127は口縁部が外傾し、口唇部が内削ぎ状を呈する。口縁部以下には斜縄文ＲＬが交差するように施される。128、129、135は口縁部に撚糸圧痕が施文される。133、139、142は０段多条のＲＬ、134は０段多条のＲＬＲが施文される。136、140は直前段多条のＲＬ、137は０段多条のＬＲ、ＲＬを用いた羽状縄文が施される。

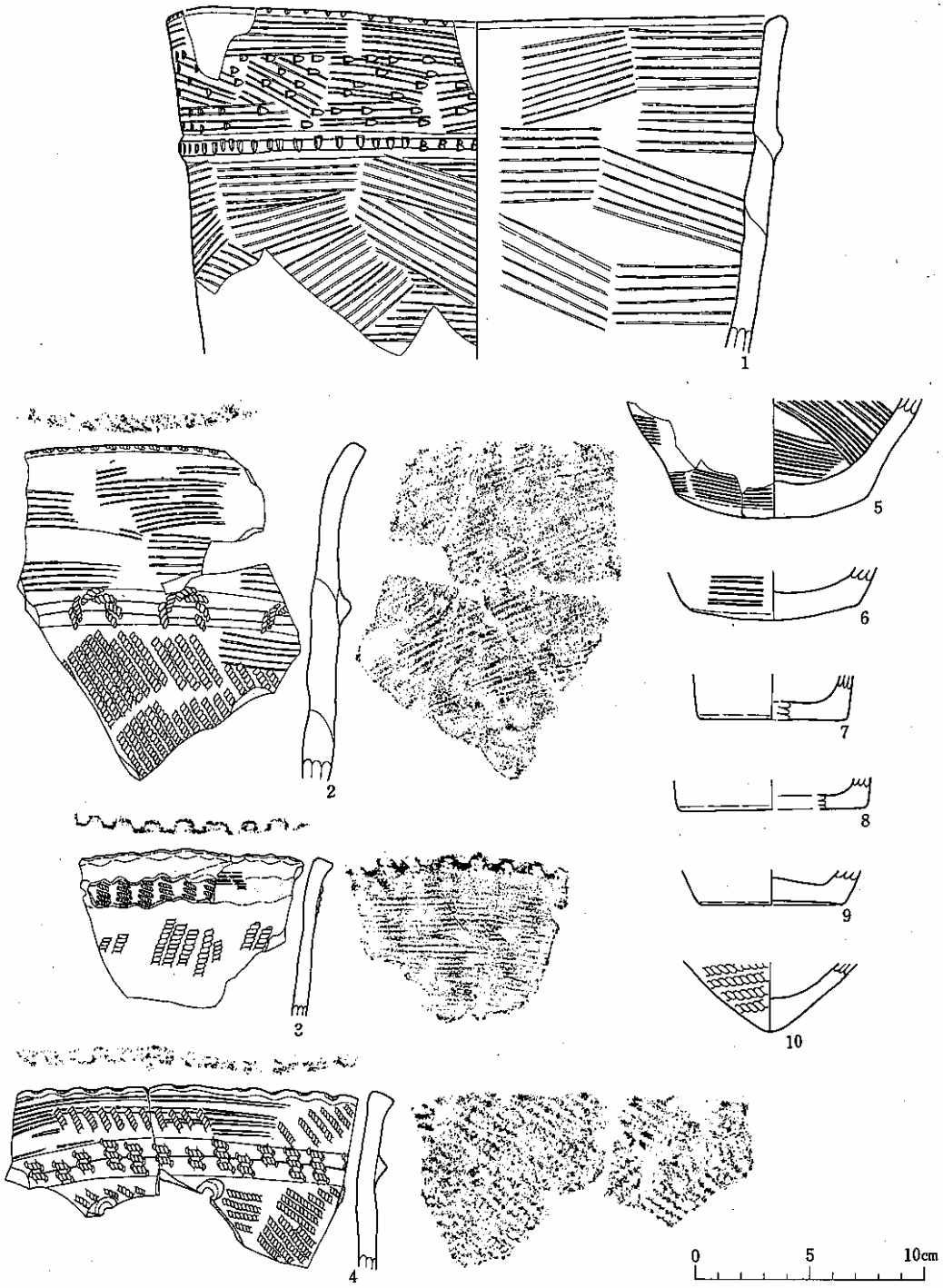
第10図122、126、130～132は、口縁部の破片で条痕文、縄文ともに見られないものであるが、口縁部の形態、文様要素などからⅣＢ１類に含められる。122は口唇部が外反し、円頭状を呈す。口唇部上面には絡条体圧痕が施文されている。６は口縁部が外傾し、口唇部が円頭状を呈す。口唇部には刻目が施される。132は口縁部が外反し、口唇部が円頭状を呈す。口唇部上面および外面に撚糸圧痕が施文される。130、131は、口縁部に撚糸圧文が施される。

ⅣＢ２類（第10図143～160）

土器外面に撚糸文が施される土器である。143は口縁部が外傾し、口唇部が角頭状を呈す。口唇部まで撚糸文がおよび、外面に刻目が施される。144は口縁部が外傾し、口唇部が角頭状を呈す。口唇部外面は無文で、上面に絡条体圧痕が施文される。口縁部以下には間隔の広い単軸絡条体Ｌを交差させて施文している。145は口縁部が外傾し、口唇部が内削ぎ状を呈す。口唇部まで撚糸文がおよび、上面には刻目が配されている。146～160は胴部の破片で、単軸絡条体Ｌによる撚糸文が施されている。

底部資料（第５図５～10）

底部資料は最も少なく、また小片のため形態を知り得ないものもあり、図示できたのは６点のみである。５、６は僅かに丸みを帯びた平底で、内、外面に貝殻条痕文が施されている。７、８は平底で、内、外面はナデ、ミガキによって調整されている。９は僅かに上げ底状になっている平底で、内、外面はナデ、ミガキによって調整されている。10は尖底で外面に斜縄文ＲＬが施文されている。



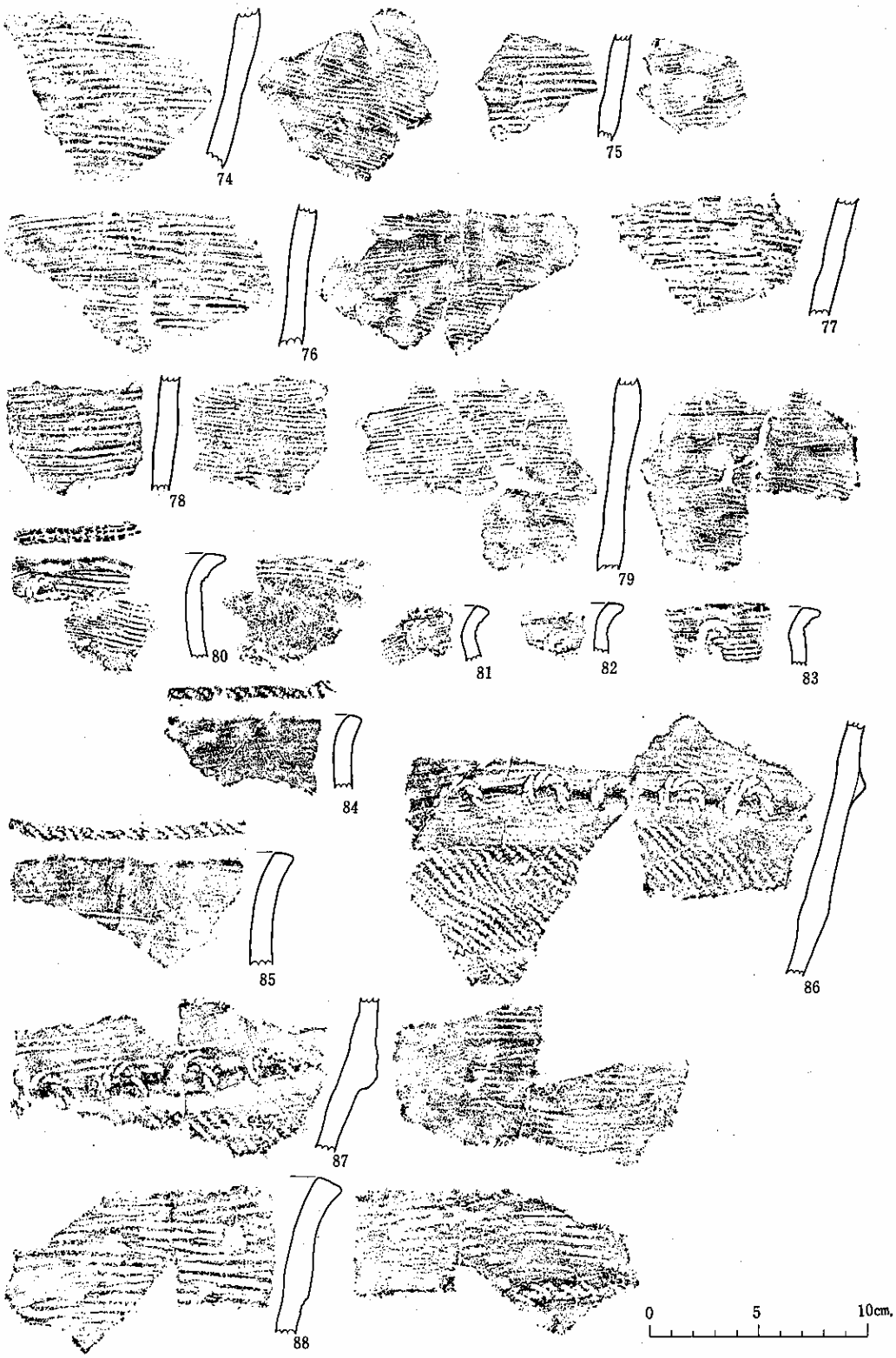
第５図　　出土遺物・土器(1)

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
0
5
10cm

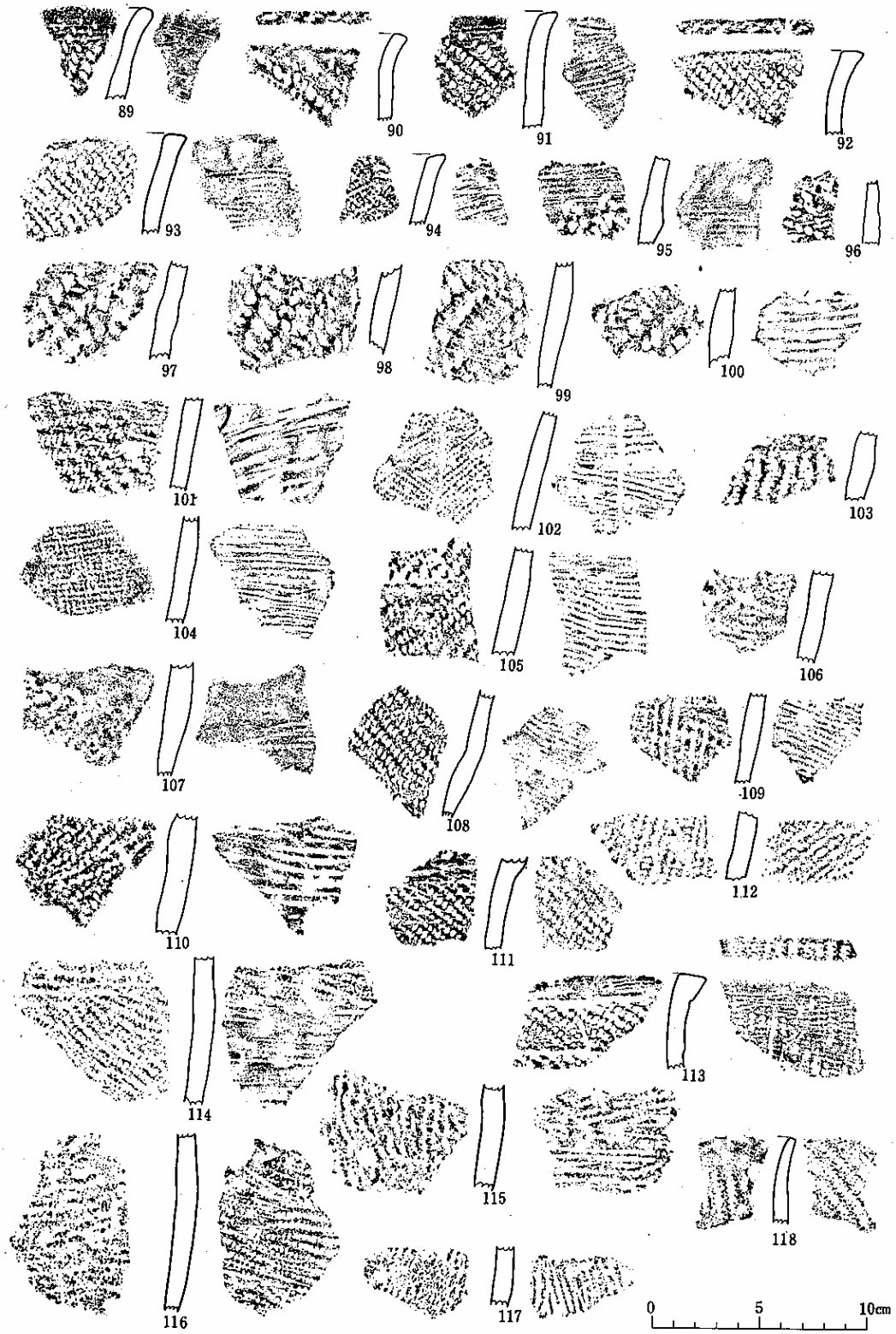
第６図　　出度遺物・土器(2)

40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
0
5
10cm

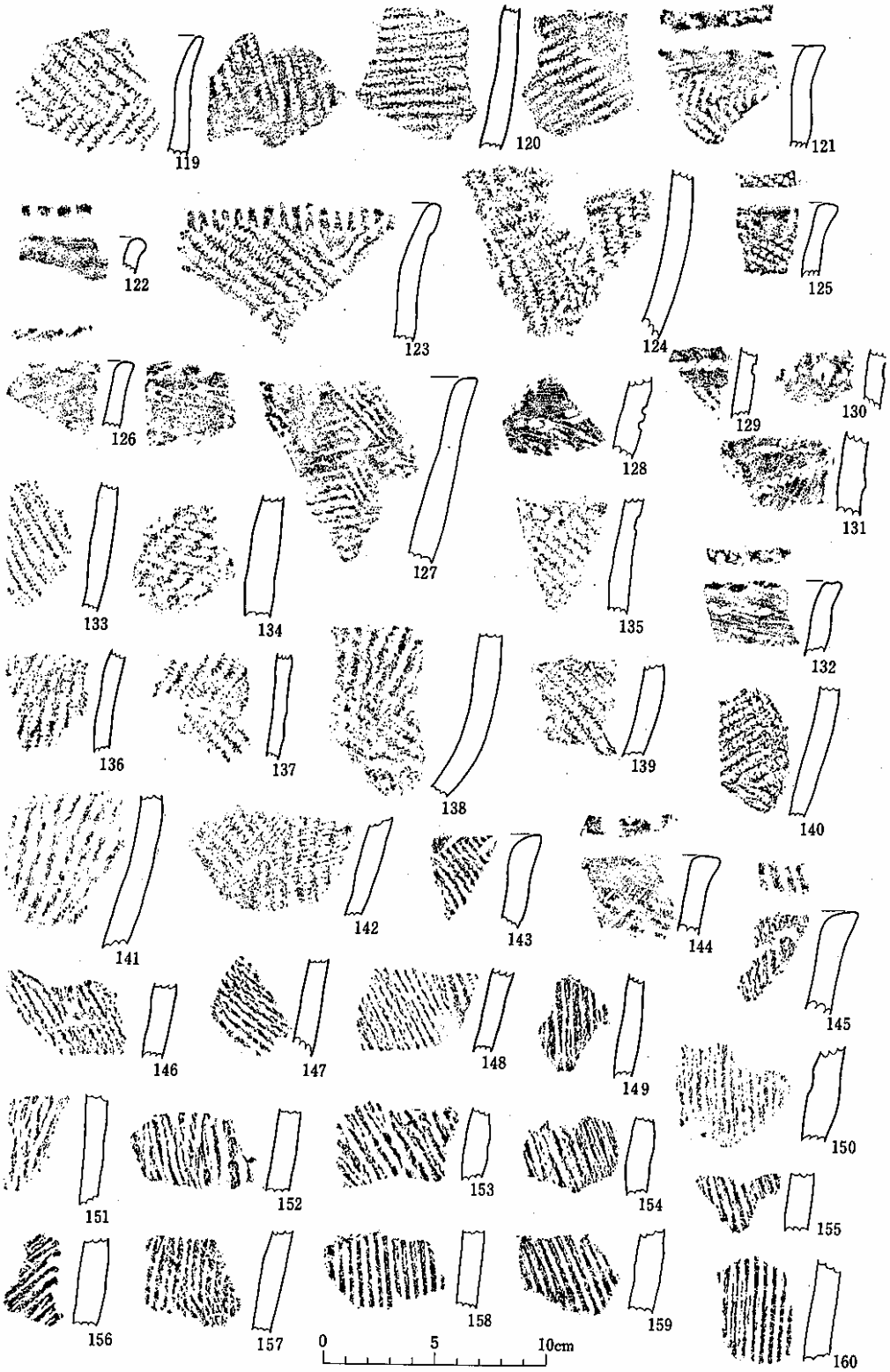
第７図　　出土遺物・土器(3)



第８図　　出土遺物・土器(4)


89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
0
5
10cm

第９図　　出土遺物・土器(5)



第10図　　出土遺物・土器(6)

ｂ．石器（第11図～第16図、第３表）

石器には、石鏃、石匙、石錐、石箆、打製石斧、不定形石器などの剥片石器や、石斧などの磨製石器、磨石、敲石、凹石、などの礫石器がある。

石鏃（第11図１～３）

１、２は基部がえぐりを入れた凹状になっている。３は平縁である。側縁は１～３とも僅かなふくらみを持つ。１、２は一部が欠損している。３はｂ面の左側に高まりが残っており、先端部まで剥離がおよんでいない。

石匙（第11図４～８）

４、５、６、８は縦長、７は横長の石匙である。５、６、８は背腹両面の全体に調整剥離がおよぶ。４、７は背腹両面の縁辺に調整剥離が施され、一次剥離面が残っている。４、６はつまみ部が欠損している。４の欠損部には小さな剥離が認められる。５のつまみ部はえぐりが顕著ではない。７、８はえぐりが明確である。７はつまみ部および刃部の一部が欠損している。４～６、８の刃部はいずれも尖頭状を呈し幅がせまい。５、６、８、は稜線を持ち、７は平坦である。７の刃部は直線的で平坦であるが刃こぼれが目立つ。

石箆（第11図９～12、第12図13～18、第13図19～21）

切断されたもの（９～12）、縦長で幅がせまく厚みのあるもの（13～15）、縦長で平坦なもの（16～19）、縦長で幅が広く平坦なもの（20、21）がある。すべて背腹両面に調整剥離が施されている。13、16は自然面を残している。14の背面の一次剥離面は風化している。12、20は腹面のバルブが除去されている。14、17は平坦な打面が残っている。13、15、16は欠損品である。21は素材となる剥片が剥離される前に持っていた剥離面を刃部に残している。

打製石斧（第13図22～24）

22は欠損部分が再調整されている。23は背面に自然面を残す。24は平坦な打面が残っている。

三点とも両面調整され刃部の角度は大きい。22、23は柄部の角度が鋭い。

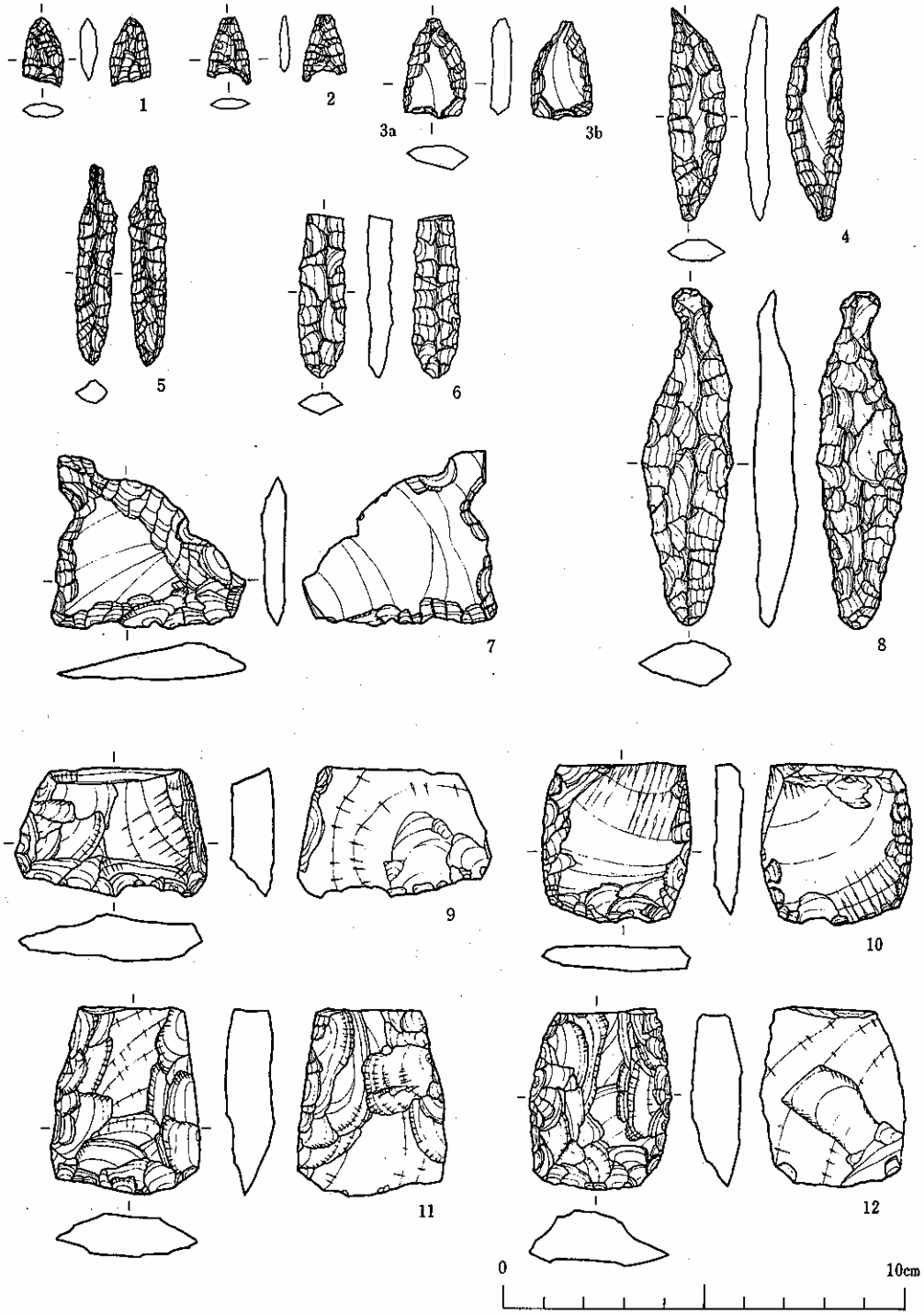
不定形石器（第14図25～29）

25、26は三角形を呈し、鋭い先端を有する。ともに一次剥離面を残す。27は小形の剥片に簡単な剥離を施し、鋭利な先端を形成している。28は平坦な打面が残っており、両面の縁辺に簡単な調整剥離が加えられている。29は円礫から剥離された剥片を素材としている。背面には前の剥片を取った剥離面が残っている。腹面に簡単な調整剥離が施されている。

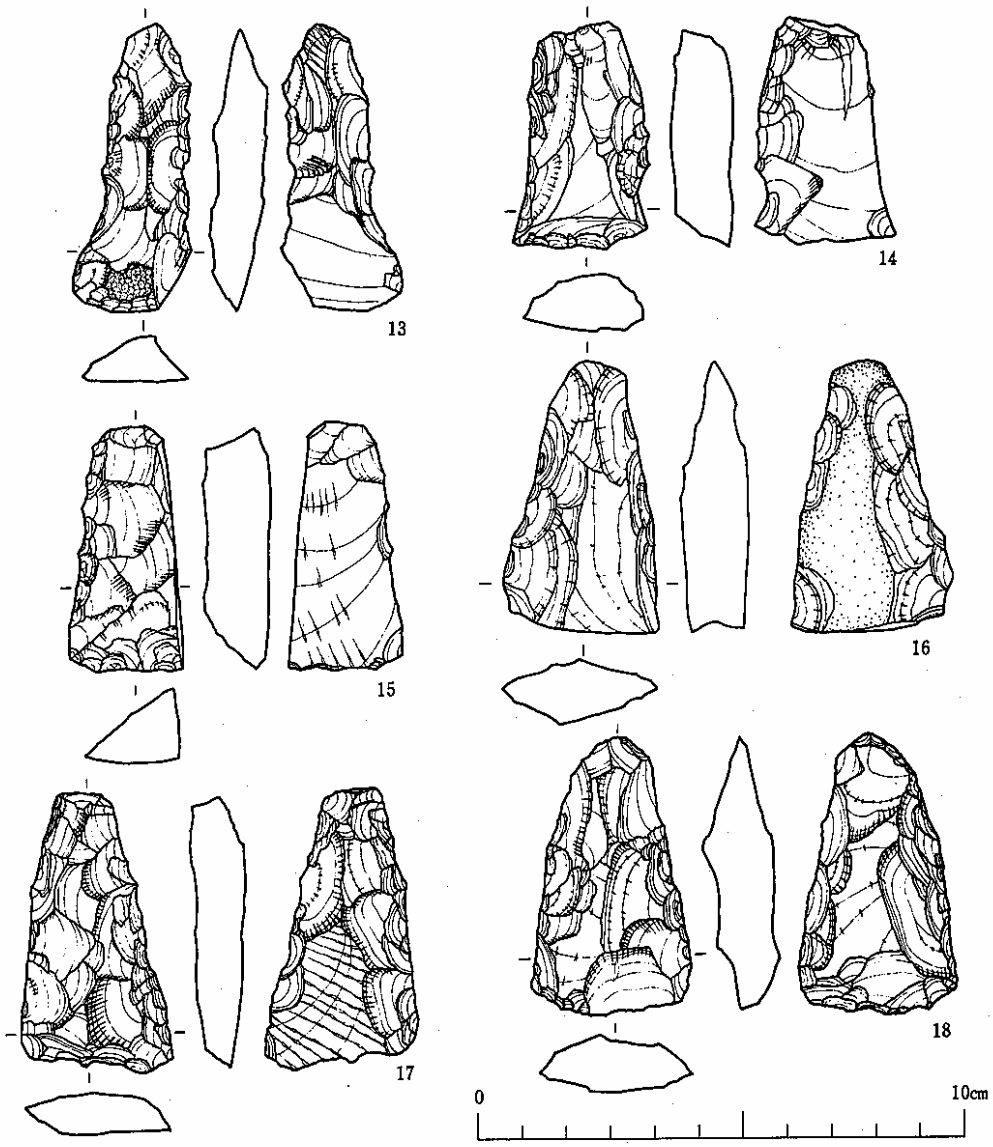
磨製石斧（第14図30）

磨製石斧が再調整されたものである。刃部には擦痕が胴部には研磨痕が見られる。ｂ面には火熱による剥落がある。

ハンマー・ストン（第14図31）



第11図　　出土遺物・石器(1)



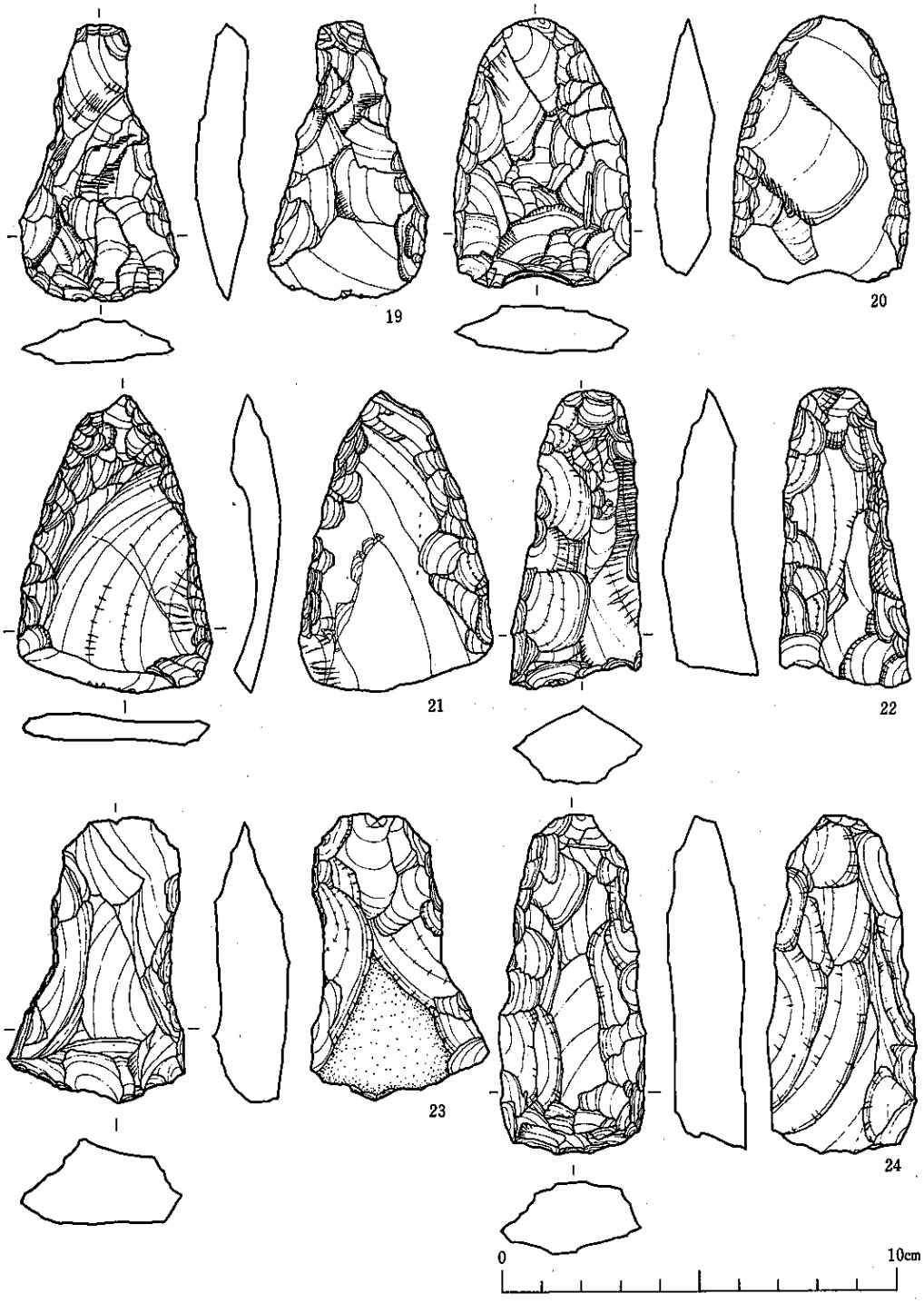
第12図　　出土遺物・石器 (2)

円礫を打ち欠いて調整し、角になった部分を敲打に使用している。角をめぐるように敲打痕が残っている。

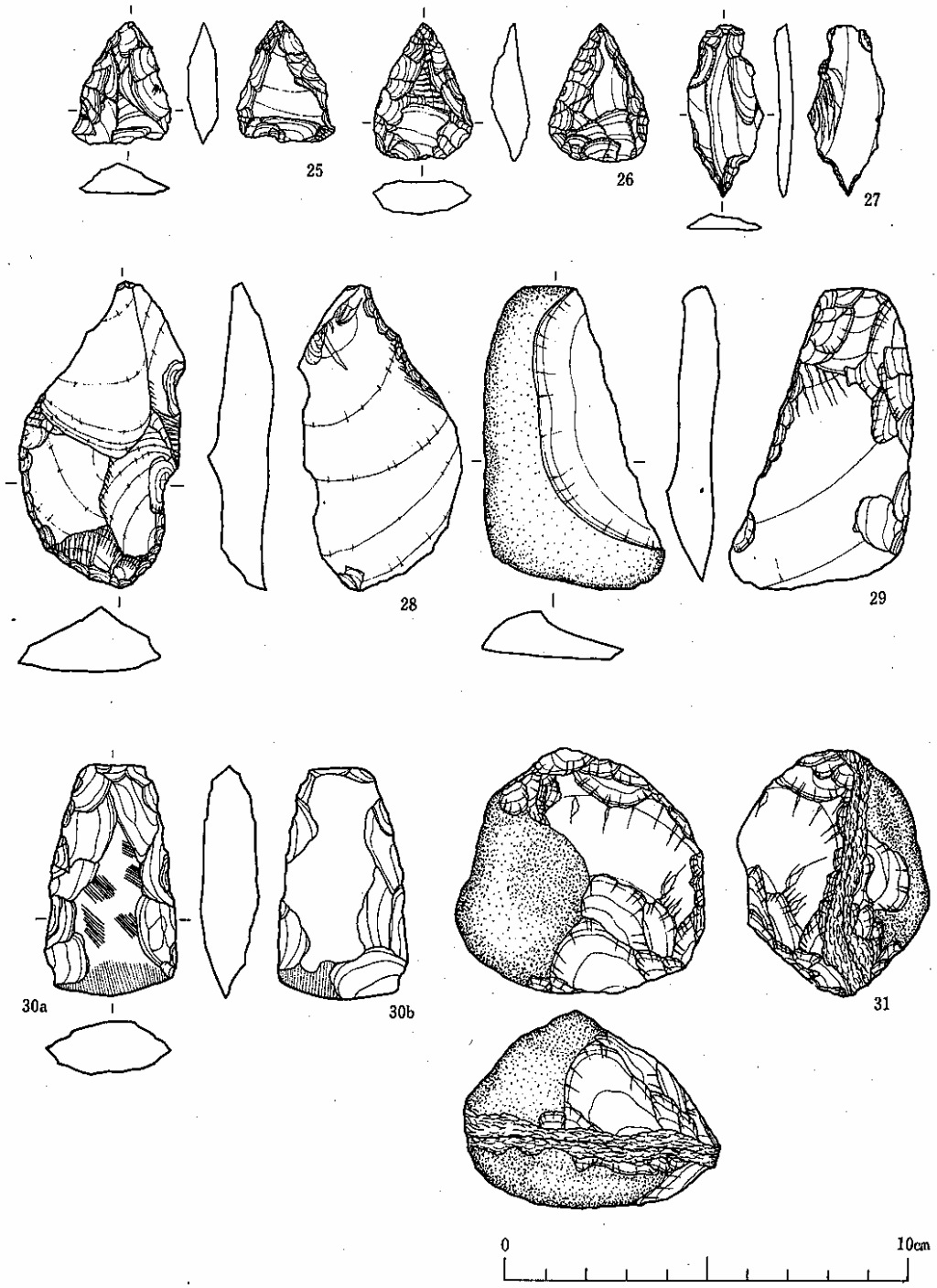
磨石、敲石、凹石（第15図32～48、第16図49～53）

32、35、36、37は円礫を用いたもので、ａ・ｂ面あるいは側縁に１～３面の研磨面をもつ。33、34は断面が三角形に近い細長の礫を用いており、ｂ面あるいは側縁に１～２面の研磨面を持つ。33、34ともに欠損しているが、割れ口の角が鋭利なのでその後は使用されていない。36には一条の短い磨溝がみられる。

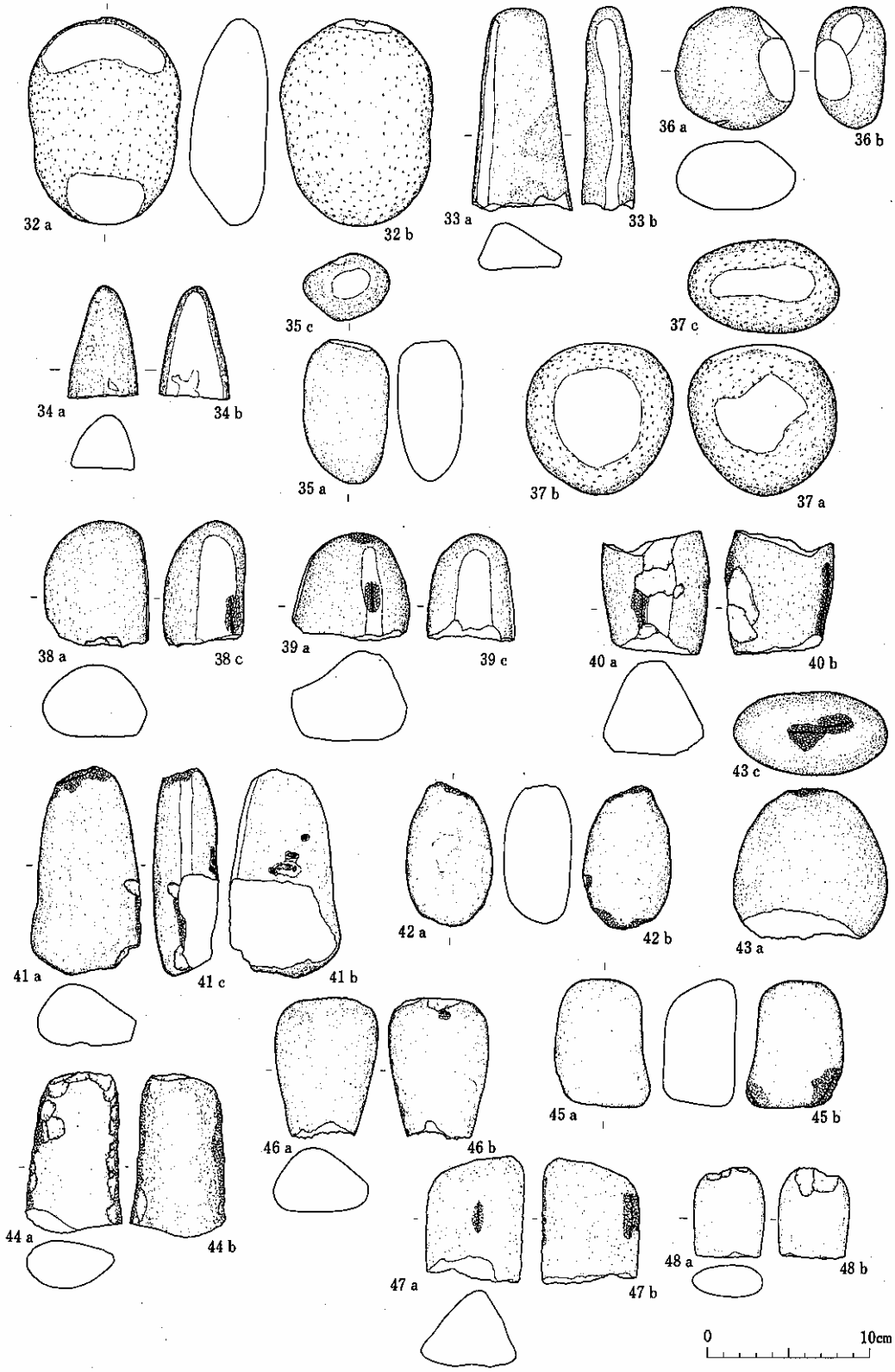
38～41は礫の側縁に１～３面の研磨面を持ち、また１～３箇所に敲打痕が認められる。敲打



第13図　　出土遺物・石器(3)



第14図　　出土遺物・石器(4)



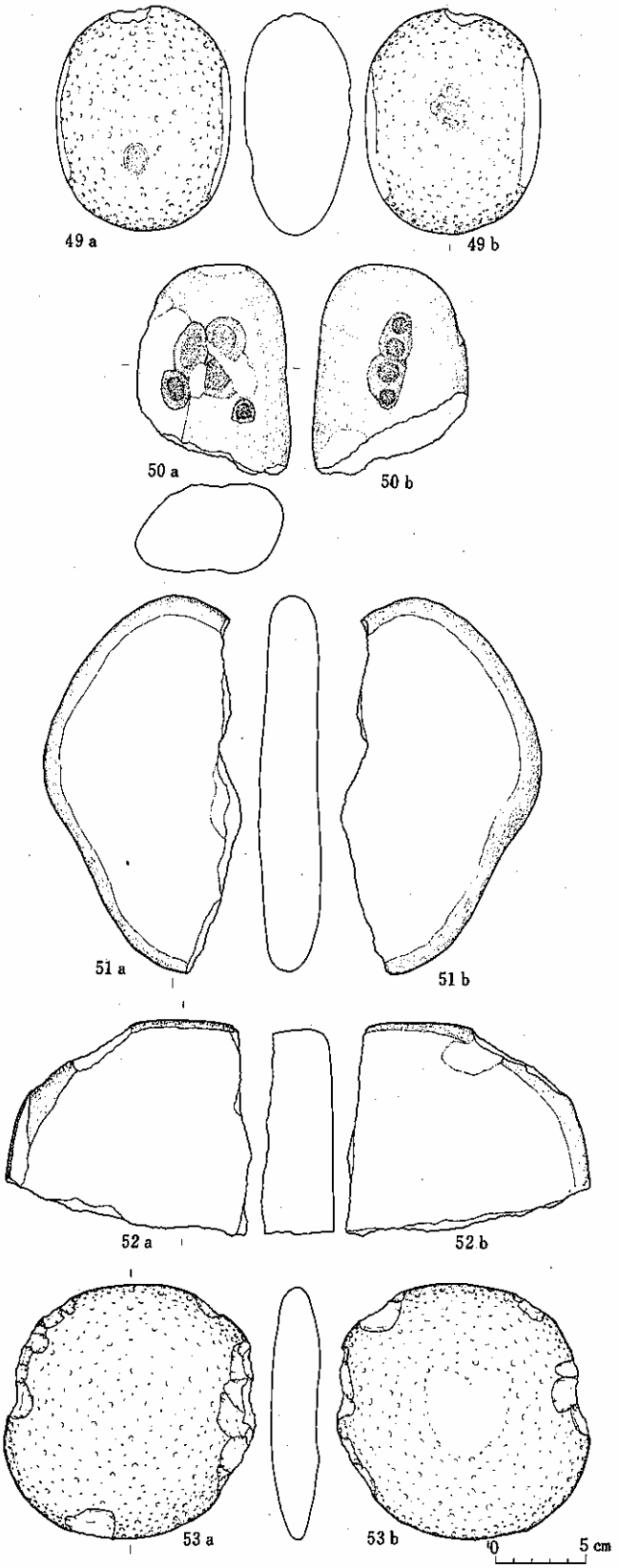
第15図　出土遺物・石器(5)

痕は研磨痕より新しい。41 にはｂ面に小さな凹が数箇所認められた。すべて欠損している。

42～48 は礫の側縁に敲打痕を持つ。42、44、45、46、47 は比較的長めの礫を用いている。43 は円礫、48 は小形の偏平な礫である。43、44、46、47、48 は欠損している。44 は側縁全体に敲打痕が認められる。他は、部分的に数箇所の敲打痕がみられる。

49、50 は円礫を用いている。49 は側縁に2面の研磨面を持ち、ａ面に1個、ｂ面に 3 個の凹部を有する。50 は欠損している。側縁に 2 面の研磨面を持ち、ａ面に 5 個、ｂ面に 4 個の凹部を有する。欠損後、研磨には使用されていない。凹部は研磨面より新しい。

51～53 は大形偏平で円形の礫を用いている。51、53 は両面に、52 は片面に磨面を有する。53 は、ｂ面の中央部が著しく研磨しており、また、側縁に多数の欠けた部分が見られる。51、52 は欠損している。



第16図　出土遺物・石器(6)

第1表　実測土器一覧表

番号	地区・層位	部位	口唇部・底部	外面	内面	その他	分類
1	K－23－Ⅲ 層	口縁部～胴部	刻目	条痕・刺突	条痕	隆帯	Ⅱ3
2	K－21－Ⅲ 層	口縁部	縄文RL	条痕、縄文RL、撚糸圧痕RL	条痕	隆帯	ⅢA1a
3	J－17－Ⅰ 層	口縁部	絡条体L圧痕	縄文RL、絡条体L圧痕	条痕	隆帯	ⅢA1a
4	K－18－Ⅰ 層 K－19－表土層	口縁部	絡条体L圧痕	条痕、縄文RL、絡条体L圧痕	条痕・縄文RL	隆帯、接合	ⅢB
5	K－21－Ⅲ 層	底部	平底	条痕	条痕		
6	J－23－Ⅰ 層	底部	平底	条痕			
7	K－19－Ⅱ 層	底部	平底	ミガキ	ミガキ		
8	J－19－Ⅱ 層	底部	平底	ミガキ	ミガキ		
9	K－20－Ⅲ 層	底部	平底	ミガキ	ナデ		
10	J－21－Ⅱ 層	底部	尖底	縄文RL	ナデ		

第2表　拓本土器一覧表

番号	地区層位	部位	口唇部	外面	内面	その他	分類
1	K20－表土	胴部		貝殻腹縁刺突			Ⅰ
2	K 20 － Ⅱ	〃		貝殻腹縁刺突、沈線			Ⅰ
3	J 26－表土	〃		沈線、絡条体圧痕		隆帯	Ⅰ
4	K19－表土	口縁部	刻目	沈線			
5	J 21 － Ⅱ	胴部		沈線			
6		〃		沈線			
7	J 21 － Ⅲ	〃		円形竹管文			
8	K 21 － Ⅲ	口縁部	刻目	刺突			
9	K 20 － Ⅱ	胴部		刺突			Ⅰ
10	K 21 － Ⅲ	〃		刺突、沈線			
11	K 20 － Ⅰ	〃		条痕、貝殻腹縁刺突		隆帯	$Ⅱ_1$
12	J 23 － Ⅰ	〃		条痕、貝殻腹縁刺突		隆帯	$Ⅱ_1$
13	J 23 － Ⅰ	〃		条痕、貝殻腹縁刺突		隆帯	$Ⅱ_1$
14	J 17 － Ⅰ	〃		条痕、貝殻腹縁刺突	条痕	隆帯	$Ⅱ_1$
15	K 20 － Ⅲ	口縁部		条痕、沈線	条痕		$Ⅱ_2$
16	J 21 － Ⅰ	〃		条痕、沈線	条痕		$Ⅱ_2$
17	K 20 － Ⅰ	胴部		条痕、沈線	条痕		$Ⅱ_2$
18	K 20 － Ⅰ	〃		条痕	条痕		$Ⅱ_2$
19	L 20 － Ⅲ	口縁部	刻目	条痕、沈線	条痕		$Ⅱ_2$
20	K 20 － Ⅰ	〃	刻目	条痕、沈線	条痕		$Ⅱ_2$
21	K 19 － Ⅱ	〃	刻目	条痕、沈線	条痕		$Ⅱ_2$
22	J 21 － Ⅲ	〃		条痕、沈線	条痕		
23	K 20 － Ⅱ	胴部		条痕、沈線	条痕		$Ⅱ_2$
24	K 20 － Ⅱ	〃		条痕、沈線	条痕		$Ⅱ_2$
25	J 21 － Ⅱ	口縁部		条痕、刺突	条痕		$Ⅱ_3$
26	K 22	〃	刻目	条痕、刺突	条痕		$Ⅱ_3$
27	K 21 － Ⅱ	〃	刻目	条痕、刺突	条痕		$Ⅱ_3$
28	J 20 － Ⅱ	〃	刻目	条痕、刺突	条痕		$Ⅱ_3$
29	K 22 － Ⅱ	〃	刻目	条痕、刺突	条痕		$Ⅱ_3$
30	K 20 － Ⅰ	胴部		条痕、刺突	条痕		$Ⅱ_3$
32	K 20 － Ⅱ	〃		条痕、刺突	条痕		$Ⅱ_3$
32	K 21 － Ⅱ	〃		条痕、刺突	条痕		$Ⅱ_3$
33	K 21 － Ⅲ	〃		条痕、刺突	条痕		$Ⅱ_3$
34	J 23 － Ⅲ	〃		条痕、刺突	条痕		$Ⅱ_3$
35	K 21 － Ⅲ	〃		条痕、刺突	条痕		$Ⅱ_3$
36	K 21 － Ⅱ	〃		条痕、刺突	条痕		$Ⅱ_3$
37	K 21 － Ⅱ	〃		条痕、刺突	条痕		$Ⅱ_3$
38	J 22 － Ⅱ	〃		条痕、刺突	条痕		$Ⅱ_3$
39	6区21－Ⅲ	〃		条痕、刺突	条痕		$Ⅱ_3$

番号	地区層位	部位	口唇部	外面	内面	その他	分類
40	J 23	胴部		条痕、刺突			
41	K 23 − III	口縁部	刻目	条痕、沈線、刺突	条痕		II4
42	K 20 − III	口縁部	刻目	条痕、沈線、刺突	条痕		II4
43	J 21 − II	口縁部	刻目	条痕、沈線、刺突	条痕		II4
44	K 20 − II	口縁部	刻目	条痕、沈線、刺突	条痕	波状口線	II4
45	K 23 − III	口縁部	刻目	条痕、沈線、刺突	条痕	隆帯、波状口縁	II4
46	K 19 − II	胴部		条痕、沈線、刺突	条痕		II4
47	K 18 − I	胴部		条痕、沈線、刺突、円形竹管文	条痕		II4
48	K 22 − III	胴部		条痕、沈線、刺突、円形竹管文	条痕	細隆起線	II4
49	K 21 − II	胴部		条痕、沈線、刺突			
50	K 23 − III	口縁部		条痕、沈線、刺突	条痕		
51	K 22 − III	胴部		条痕、撚糸圧痕			
52	K 21 − I	胴部		条痕、刺突、撚糸圧痕	条痕		
53	L 21 − III	胴部		条痕、撚糸圧痕			
54	J 22	胴部		条痕、絡条体圧痕、絡条体L圧痕	条痕		
55	K 18 − II	口縁部	絡条体圧痕	条痕、絡条体圧痕、指頭状圧痕	条痕		
56	K 21 − III	胴部		条痕	条痕		II
57	K 21 − III	胴部		条痕	条痕		II
58	J 18 − II	胴部		条痕	条痕		II
59	L 21 − III	口縁部		条痕			
60	J 22 − III	口縁部		条痕	条痕		
61	K 20 − III	口縁部		条痕			
62	J 21 − I	口縁部		条痕			
63	K 20 − III	口縁部	刻目	条痕			
64	K 21 − III	口縁部	刻目	条痕	条痕		
65	K 21 − II	口縁部	刻目	条痕	条痕		
66	J 22	口縁部	刻目	条痕	条痕		
67	K 21 − III	口縁部	刻目	条痕			
68		口縁部		条痕	条痕		
69	J 22	口縁部	刻目	条痕	条痕		
70	K 21 − III	口縁部	刻目	条痕	条痕		
71	K 21 − III	胴部		条痕			II
72	K 21 − III	胴部		条痕	条痕		II
73	K 21 − III	口縁部	刻目	条痕	条痕	波状口縁	II
74	K 21 − III	胴部		条痕	条痕		II
75	K 21 − III	胴部		条痕	条痕		II
76	K 20 − I	胴部		条痕	条痕		II
77	K 20 − I	胴部		条痕	条痕		II
78	K 20 − I	胴部		条痕	条痕		II
79	K 21 − III	胴部		条痕	条痕		II
80	K 18 − I	口縁部	貝殻腹縁刺突	条痕条撚糸RL圧痕	条痕		III A1a
81	K 18 − I	口縁部	貝殻腹縁刺突	条痕、撚糸RL圧痕	条痕		III A1a
82	J 19 − II	口縁部	貝殻腹縁刺突	条痕、撚糸RL圧痕	条痕		III A1a
83	K 18 − I	口縁部	貝殻腹縁刺突	条痕、縄文RL、撚糸圧痕	条痕		III A1a
84	K 21 − III	口縁部	縄文RL	条痕	条痕		III A1a
85	K 21 − III	口縁部	縄文RL	条痕	条痕		III A1a
86	K 21 − III	胴部	縄文RL	条痕、縄文RL、撚糸RL圧痕	条痕	隆帯	III A1a
87	K 21 − II	胴部	縄文RL	条痕、縄文RL、撚糸RL圧痕	条痕	隆帯	III A1a
88	K 21 − III	口縁部	撚糸LR圧痕	条痕、縄文LR、撚糸LR圧痕	条痕	隆帯	III A1a
89	K 21 − II	口縁部		条痕、縄文LR	条痕		III A1b
90	K 23 − II	口縁部	撚糸RL圧痕	縄文RL	条痕		III A1b
91	J 21 − II	口縁部		縄文RL	条痕		III A1b
92	K 20 − III	口縁部	撚糸RL圧痕	縄文RL	条痕		III A1b
93	K 20 − III	口縁部	撚糸RL圧痕	縄文RL	条痕		III A1b
94	K 21 − III	口縁部	刻目	縄文RL	条痕		III A1b
95	K 19 − III	胴部		条痕、撚糸圧痕	条痕		III A1a
96	K 20 − III	胴部		条痕、縄文RL撚糸圧痕			III A1a
97	J K22−III	胴部		縄文LR	条痕		III A1
98	J K22−III	胴部		縄文LR	条痕		III A1
99	J K22−III	胴部		縄文LR	条痕		III A1
100	K 22 − III	胴部		縄文LR	条痕		III A1

番号	地区層位	部位	口唇部	外面	内面	その他	分類
101	J 18 − II	胴部		条痕、縄文LR(0段多条)	条痕		III A1
102	K 21 − II	胴部		縄文RL	条痕		III A1
103	K 21 − II	胴部		縄文RL	条痕		III A1
104	K 21 − II	胴部		縄文RL	条痕		III A1
105	K 22	胴部		縄文LRL	条痕		III A1
106	K 23	胴部		縄文R	条痕		III A1
107	K 20 − III	胴部		縄文LR	条痕		III A1
108	K 21 − I	胴部		縄文RL	条痕		III A1
109	K 21 − III	胴部		縄文RL	条痕		III A1
110	K 21 − II	胴部		縄文LR	条痕		III A1
111	K 21 − I	胴部		条痕、縄文RL、絡条体圧痕	縄文RL	隆帯	III B
112	K 21 − III	胴部		条痕、縄文RL	縄文RL		III B
113	J 22 − III	口縁部	絡条体圧痕	条痕、縄文RL、沈線	条痕、縄文RL		III B
114	K 18 − III	胴部		縄文RL	条痕、縄文RL		III B
115	K 17 − I	胴部		縄文RL	条痕、縄文RL		III B
116	K 13 − I	胴部		縄文RL	条痕、縄文RL		III B
117	K 20 − I	胴部		撚糸文L	条痕		III A 2
118	J 23 − III	口縁部		縄文RL	縄文RL	波状口縁	IV A
119		口縁部	刻目	羽状縄文RL、LR（0段多条）	縄文RL		IV A
120	J 21 − III	胴部		縄文RL（0段多条）	縄文RL（0段多条）		IV A
121	K 20−表土	口縁部	撚糸圧痕	羽状縄文RL、LR			IV B1
122	K 21 − II	口縁部	撚糸圧痕				(IV B1)
123	J 23 − III	口縁部	刻目	羽状縄文RL、LR（0段多条）		折返し状口縁	IV B1
124	J 23 − III	胴部		羽状縄文RL、LR（0段多条）			IV B1
125	K 21 − II	口縁部	縄文RL	縄文RL			IV B1
126	K 20 − I	口縁部	刻目				(IV B1)
127	K 19 − II	口縁部		縄文RL			IV B1
128	J 21 − II	胴部		縄文R、撚糸R圧痕			IV B1
129	K 21 − I	胴部		縄文RL、撚糸R圧痕			IV B1
130	K 23 − III	胴部		撚糸圧痕			(IV B1)
131	J 21 − III	胴部		撚糸LR圧痕			(IV B1)
132	J 22	口縁部	撚糸圧痕	撚糸L圧痕			(IV B1)
133	K 23 − III	胴部		縄文RL（0段多条）			IV B1
134	K 20 − I	胴部		縄文RLR（0段多条）			IV B1
135	K 19	胴部		縄文RL、撚糸圧痕			IV B1
136	J 23 − III	胴部		縄文RL（直前段多条）			IV B1
137	J 23 − III	胴部		羽状縄文RL、LR（直前段多条）			IV B1
138	K 20 − III	胴部		縄文RL			IV B1
139	J 20 − II	胴部		縄文RL（0段多条）			IV B1
140	K 22 − III	胴部		縄文RL（0段多条）			IV B1
141	K 19 − II	胴部		縄文RL			IV B1
142	J 23 − III	胴部		縄文RL（0段多条）			IV B1
143	K 20 − III	口縁部	刻目	撚糸文L			IV B2
144	K 18 − III	口縁部	絡条体圧痕	撚糸文L			IV B2
145	K 18 − II	口縁部	刻目	撚糸文L			IV B2
146	K 21 − I	胴部		撚糸文L			IV B2
147	K 21 − II	胴部		撚糸文L			IV B2
148	J 22	胴部		撚糸文L			IV B2
149	K 21 − III	胴部		撚糸文L			IV B2
150	J 19 − I	胴部		撚糸文L			IV B2
151	K 22 − III	胴部		撚糸文L			IV B2
152	K 21 − I	胴部		撚糸文L			IV B2
153	K 21 − I	胴部		撚糸文L			IV B2
154	K 21 − II	胴部		撚糸文L			IV B2
155	K 22 − III	胴部		撚糸文L			IV B2
156	J 21 − I	胴部		撚糸文L			IV B2
157	K 20 − I	胴部		撚糸文L			IV B2
158	K 22 − III	胴部		撚糸文L			IV B2
159	K 22 − III	胴部		撚糸文L			IV B2
160	K 21 − II	胴部		撚糸文L			IV B2

第3表　石器計測表

番号	種別	地区層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	備考
1	石鏃	K 21 − III	(17.3)	9.9	3.9	0.4	珪質頁岩	欠損
2	〃	K 21 − III	(17.0)	10.8	2.8	0.2	〃	欠損
3	〃	K 21 − I	(24.6)	15.8	5.6	1.8	流紋岩	
4	石匙	J 18 − II	(53.5)	14.8	5.3	3.9	珪質頁岩	欠損
5	〃	K J 20 − III	49.8	9.5	6.0	2.0	〃	
6	〃	K 22 − III	(40.8)	12.3	5.3	2.4	石英安山岩（珪化）	欠損
7	〃	K 23 − III	(58.8)	42.1	8.4	14.1	珪質頁岩	欠損
8	〃	J 20 − III	84.5	22.5	10.1	15.6	珪質頁岩	
9	石錐	K 20 − III	48.4	31.9	11.4	19.8	石英安山岩質	
10	〃	J 24 − I	(40.3)	37.7	8.5	18.8	石英安山岩質凝灰岩(珪化)	
11	〃	K 22 − II	46.9	37.5	11.0	23.6	珪質頁岩	
12	〃	J 23 − III	45.5	35.6	13.4	22.4	〃	
13	〃	K 23 − III	66.6	27.3	13.1	17.8	〃	欠損
14	〃	K 21 − I	52.7	32.1	14.5	25.7	〃	
15	〃	J 18 − 溝内	55.8	24.5	16.9	24.4	頁岩	欠損
16	〃	K 18−III	62.0	35.3	15.6	30.6	細粒石英安山岩質凝灰岩	欠損
17	〃	J 17 − I	64.5	34.7	12.6	26.8	石英安山岩質凝灰岩	
18	〃	K 21 − I	63.7	36.7	16.1	33.9	頁岩	
19	〃	J 17 − I	70.6	38.6	11.6	31.1	珪質頁岩	
20	〃	K 22 − III	68.5	45.3	34.7	48.4	〃	
21	〃	J 18−I	75.6	49.6	9.8	38.0	〃	
22	打製石斧	J 22 − III	77.6	34.2	20.0	45.1	〃	
23	〃	K 20 − I	73.0	44.5	20.6	62.1	細粒石英安山岩質凝灰岩(珪化)	
24	〃	K 19 − 表土	85.2	37.4	20.2	74.7	凝灰岩質頁岩	
25	不定形	K 21 − II	30.1	24.9	8.1	4.5	細粒石英安山岩質凝灰岩質(珪化)	
26	〃	J 21 − III	34.3	24.7	9.0	6.6	珪質頁岩	
27	〃	K 22 − III	42.8	18.7	4.3	2.8	〃	
28	〃	KL20 − 表土	75.6	39.6	16.9	37.9	〃	
29	〃	J 21 − II	80.0	43.2	11.0	37.5	砂質頁岩	
30	磨製石斧	J 22 − I	58.2	33.0	14.8	33.1	石英安山岩	再調整
31	ハンマー・ストン	K 20 − III	61.0	62.0	45.0	208	頁岩	
32	磨石・敲石・凹石	K 22 − III	128.6	94.6	46.8	762	石英安山岩	
33	〃	J 16−整地	(124.6)	58.2	30.2	320	砂質頁岩	
34	〃	K 19 − II	(70.8)	43.4	33.4	90	石英安山岩質凝灰岩	
35	〃	J 19 − II	90.8	53.2	41.4	255	石英閃緑岩	欠損
36	〃	J 20 − II	76.5	72.8	41.7	340	閃緑岩	欠損
37	〃	K 22 − III	95.2	90.1	59.6	600	石英安山岩	
38	〃	K 19 − 表土	(80.6)	(64.8)	(49.0)	365	石英閃緑岩	欠損
39	〃	L 21 − III	(66.0)	(69.0)	(54.6)	320	〃	欠損
40	〃	K 19 − 表土	(76.6)	(66.2)	(61.6)	430	石英安山岩	欠損
41	〃	J 20 − II	(134.5)	(69.2)	(38.9)	400	〃	欠損
42	〃	K 22−IV上面	(88.1)	55.6	40.9	260	石英閃緑岩	欠損
43	〃	K 21 − I	(94.4)	95.1	52.9	585	〃	欠損
44	〃	K 22 − II	(98.3)	54.3	29.6	263	砂岩	欠損
45	〃	K 21 − III	78.7	60.5	43.9	282	石英斑岩	
46	〃	J 19 − II	(87.6)	63.2	43.8	308	石英安山岩	欠損
47	〃	KL 20−表土	(78.2)	60.5	49.9	300	〃	欠損
48	〃	J 20 − II	(56.7)	44.1	20.6	81	〃	欠損
49	〃	K 20 − I	(125.8)	(97.4)	61.8	1,000	〃	
50	〃	J 18 − I	(117.5)	88.3	53.7	610	〃	
51	〃	J 23 − I	218.0	102.5	39.3	1,220	石英閃緑岩	欠損
52	〃	K 23−IV上面	(137.9)	(115.2)	(42.8)	900	石英安山岩	欠損
53	〃	J 21 − II	551.9	136.2	38.0	700	〃	

２．小竪穴遺構とその出土遺物（第 17 図）

〔遺構の確認〕　Ｊ、Ｋ－23区においては遺物包含層第Ⅲ層上部で、Ｊ、Ｋ－24区においては遺物包含層第Ⅳ層（漸移層）上部で確認された。しかしⅢ層、Ⅳ層ともに木根による攪乱がおよんでおり、遺構確認面が直ちに切り込み面を意味するものではないと考えられる。

〔重複、改築〕　共に認められなかった。

〔平面形〕　西、南、北側の一部が攪乱をうけているが、残存している壁から一辺が２m前後の方形を呈していると考えられる。

〔堆積層〕　７層に細分される。１層は暗褐色（7.5ＹＲ$^{3}/_{3}$）のシルトで構成されており、軽石粒を少量含んでいる。木根による攪乱が著しいが、住居跡の壁際を除くほぼ全体に分布が認められた。２層は黒褐色（7.5ＹＲ$^{3}/_{2}$）のシルトで構成されており住居跡の北壁から南側にかけて分布が認められた。３層は褐色（7.5ＹＲ$^{4}/_{4}$）のシルトで構成されており、明黄褐色（10ＹＲ$^{7}/_{6}$）の地山粒を多量に含んでいる。南壁から北側にかけて分布し床面に達している。中央部に赤褐色（2.5ＹＲ$^{4}/_{8}$）の焼土を含む箇所がみられた。４層、５層、６層は北壁から南へ傾斜しながら堆積し床面に達している。４層は黒褐色（7.5YR$^{2}/_{2}$）のシルトで構成され地山粒を少量含んでいる。５層は褐色（7.5ＹＲ$^{4}/_{6}$）のシルトで構成されている。６層は明黄褐色（10ＹＲ$^{7}/_{6}$）の地山粒で構成され黒褐色（7.5ＹＲ$^{2}/_{2}$）のシルトを少量含む。７層は褐色（7.5ＹＲ$^{7}/_{6}$）シルトで構成されている。南壁に沿い北へ傾斜して堆積している。

〔壁〕　北壁西半、東壁、南東コーナー付近が攪乱を受けて消滅している。東壁、西壁、北壁は漸移層（遺物包含層第Ⅳ層）および地山層からなり、南壁は遺物包含層第Ⅲ層および漸移層からなる。立ち上りは南壁が緩やかで他は急である。壁高は北壁付近で45～55cmあり、南に行くほど削平されて低くなり、西壁は20～55cm、南壁は10～20cmである。

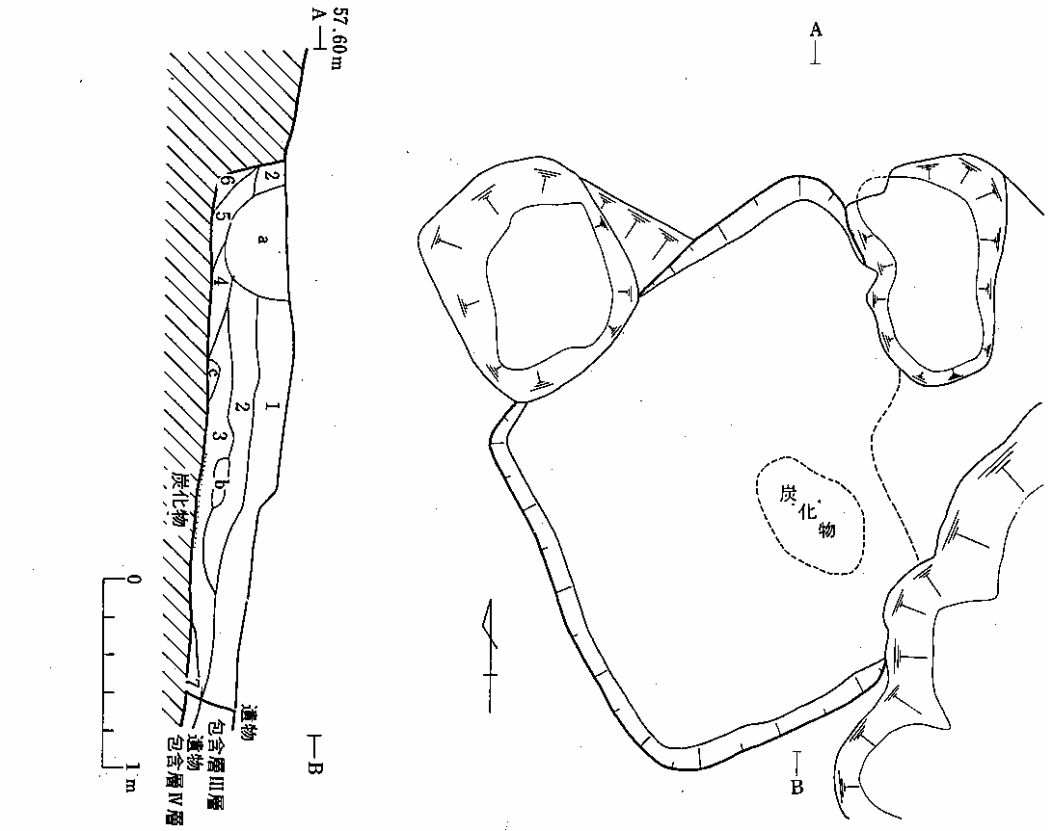
〔床〕　東南部分が攪乱を受けて消滅している。地山層および漸移層からなる。北→南方向へ緩やかに傾斜しており、それにともなって地山層→漸移層へと移行が見られる。床面はほぼ平面で、堅い部分は見られなかった。中央部から東南よりの所に30×50cmの範囲で炭化物が検出された。

〔出土遺物〕（第17図１～５）

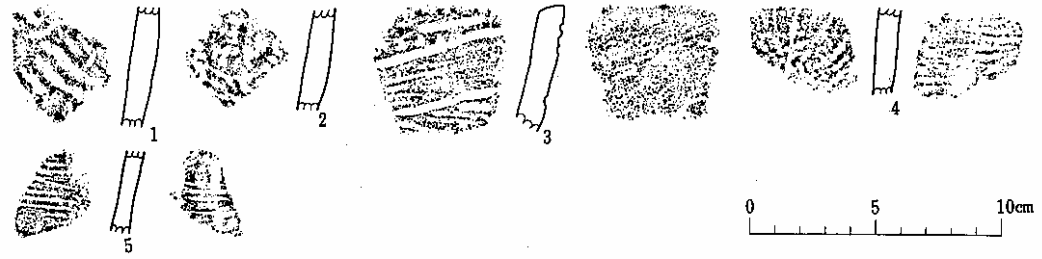
小竪穴堆積土第１層より遺物包含層出土ⅡＢ類（１、２）、ⅣＢ１類（３、５）、ⅢＡ１類（４）が出土している。また第２層からは無文でナデ、ミガキ調整の施された土器２片が出土しているが、一方は器壁が薄く繊維を含まず、他一方は器壁が厚く繊維を含んでいる。繊維を含まない方はＩ類に対比できる。繊維を含む方は類別が困難である。第３層からは欠損した円礫が一個出土しているが、残っている部分に使用痕は認められず、石器として使用されたものかどうか判断し難い。

〔年代・性格〕　年代は遺物包含層第Ⅲ層を切っていることから、それより新しい時期のもの

であることがわかる。しかし床面からの出土遺物はなく正確な年代決定は難しい。床面から炭化物が検出されているが、面そのものは焼けていない。また柱穴等も検出されておらず、その性格、用途は不明である。



層No.	土　色	土 性	備　考	層No.	土　色	土 性	備　考
1	暗褐色 (7.5YR3/3)	シルト	軽石粒を少量含む	6	明黄褐色(10YR7/6)	クレイ	黒褐色 (7.5YR3/2) シルトを少量含む
2	黒褐色 (7.5YR3/2)	シルト		7	褐　色(7.5YR4/6)	シルト	
3	褐　色 (7.5YR4/4)	シルト	地山粒を多量に、炭化物を少量含む。	a	暗 褐 色 (7.5YR3/2)	シルト	表土とほぼ同じ攪乱
4	褐　色 (7.5YR3/2)	シルト	地山粒を少量含む	b	赤 褐 色 (2.5YR4/8)	シルト	焼土を多量に含む
5	褐　色 (7.5YR4/6)	シルト		c	明黄褐色(10YR7/6)	クレイ	地山のブロック



第17図　　小竪穴遺構と出土構と出土遺物

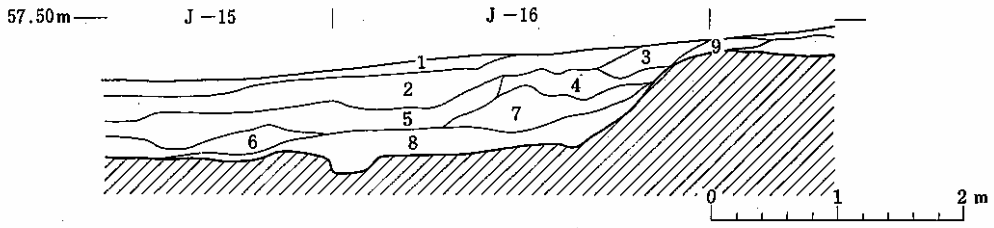
３．その他の遺構・遺物

（１）溝状遺構

溝状遺構はＪ－17～22、Ｉ－22～24区で検出された。溝の方向はN－6°－Eで、Ｉ－24区、以北は削平されている。遺構確認面は地山であるが、断面観察の結果、少なくとも遺物包含層第Ⅱ層以上の面から堀り込まれていることがわかった。この溝状遺構は、遺物包含層の東端部を切っており、またＪ－17区において整地層に切られている。溝の東側は斜面となっており、東壁の上部が消滅している。このため実際の規模は不明であるが、現存部分は上端幅35～90cm、下端幅20～40cm、深さ10～45cmである。壁は緩やかな角度で立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土は２層認められ、いずれも地山粒を含むシルトである（第４図）。遺物として縄文時代早期末の土器、石器が少量出土しているが遺物包含層からの流れ込みである可能性が強い。

（２）整地層（第 18 図）

整地層はK～Ｊ－15～17区で検出された。遺構確認面は漸移層上面である。北側において溝状遺構および遺物包含層を切っている。Ｊ－15区の東および南は斜面となっており、そこで整地層は終っている。したがって残りの範囲は、調査区外の南西方向へ僅かに広がる程度と推定される。層の厚さは65～75cmで明黄褐色（10ＹＲ$^{7}/_{6}$）の地山層を基盤に一度斜面を切り崩して平坦にした後形成している。層は７層に細分されシルト、ブロック状の地山粒を含むシルト、切り崩した地山層などからなる。周囲から投げ込まれたように堆積しており、しっかりと整地しているわけではない。遺物は縄文時代早期末の土器、石器、須恵器の小片が出土しているが、



層No.	土　　色	土　性	備　　考	層No.	土　　色	土　性	備　　考
1	極暗褐色　（7.5 ＹＲ$^{3}/_{3}$）	シ　ル　ト	表　土	6	暗 褐 色　（7.5 ＹＲ$^{3}/_{4}$）	シ　ル　ト	地山ブロック混入
2	黒 褐 色　（7.5 ＹＲ$^{3}/_{2}$）	砂質シルト	地山ブロック混入	7	明黄褐色　（10ＹＲ$^{7}/_{6}$）	ク　レ　イ	地　山
3	黒 褐 色　（7.5 ＹＲ$^{3}/_{2}$）	シ　ル　ト		8	極暗褐色　（7.5 ＹＲ$^{2}/_{3}$）	シ　ル　ト	
4	暗 褐 色　（7.5 ＹＲ$^{3}/_{4}$）	シ　ル　ト	地山ブロック混入	9	黒 褐 色　（7.5 ＹＲ$^{2}/_{2}$）	砂質シルト	
5	黒 褐 色　（7.5 ＹＲ$^{2}/_{2}$）	シ　ル　ト					

第18図　整地層断面図

いずれも混入と考えられる。

（3）表土出土遺物（第19図1～3）

笄（第19図1）J－19区において表土層から出土している。地金は銅製で、鍍金はされていない。全長は、21.4cmで、肩から耳掻きまでは、1.3cmある。幅は耳掻き部で0.5cm、頸部で0.2cm、肩部で1.3cm、胴部で1.3cm、穂先付近で0.5cmである。厚さは穂先付近で0.2cm、胴部で0.3cmと薄い。

耳掻きは、表向きで、反が小さい。耳掻きの立ち上がりが高く、肩のはった造り込みを示す。地板は、眉形から木瓜形まで7.4cm、幅1.1cmで彫りは浅い。小縁の幅は各々0.1cm、裏板は肉薄である。地板には魚子が配されているが、目貫部分は脱落しており、孔が中央部に見られるだけである。

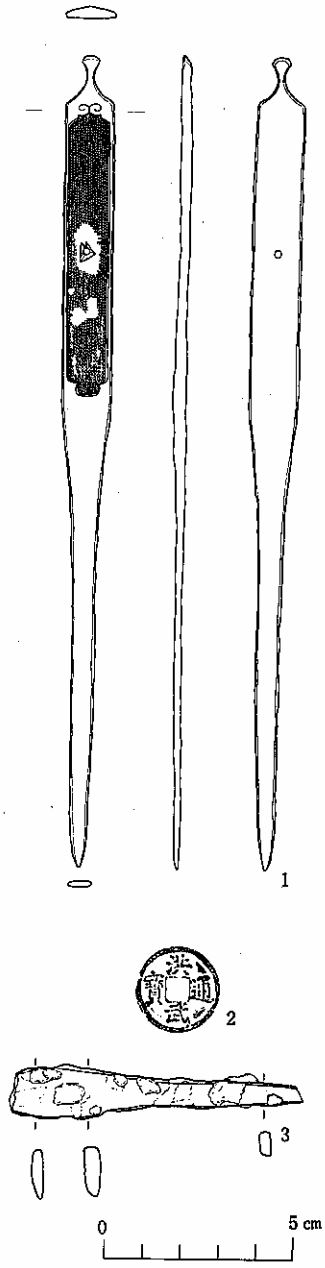
このような特徴を示す笄は、近世のものと考えられている。県内では、白石市湯ノ倉遺跡（宮教委：1980）から、鎌倉時代末期～南北朝時代のものと考えられている逆耳の笄が出土している。

古銭（第19図2）

Ⅰ－22区において～表土第2層より洪武通宝（初鋳年1868年）が一枚出土している。

刀子（第19図3）

J－18区において、表土第2層より一点出土している。刀身の一部と中子が残存しており、刃関に段がついている。刀身は平造りである。銹化が著しい。



第19図 南区表土出土遺物

B．北区

北区では、表土→旧表土→漸移層→地山という基本層位が確認された。

（表土）　2層に細分される。上層は黒褐色（7.5YR$^{2}/_{2}$）のシルト、下層は黒色（7.5YR$^{2}/_{1}$）のシルトで構成されている。

（旧表土）黒褐色（7.5YR$^{2}/_{2}$）の砂質シルトで構成され、しまりがある層である。

（漸移層）黒褐色（7.5YR$^{2}/_{2}$）の砂質シルトおよび明黄褐色（10YR$^{7}/_{6}$）の地山粒で構成され

ている。

（地山層）明黄褐色（10YR$^{7}/_{6}$）のクレイで構成されている。部分的に砂質を呈する。

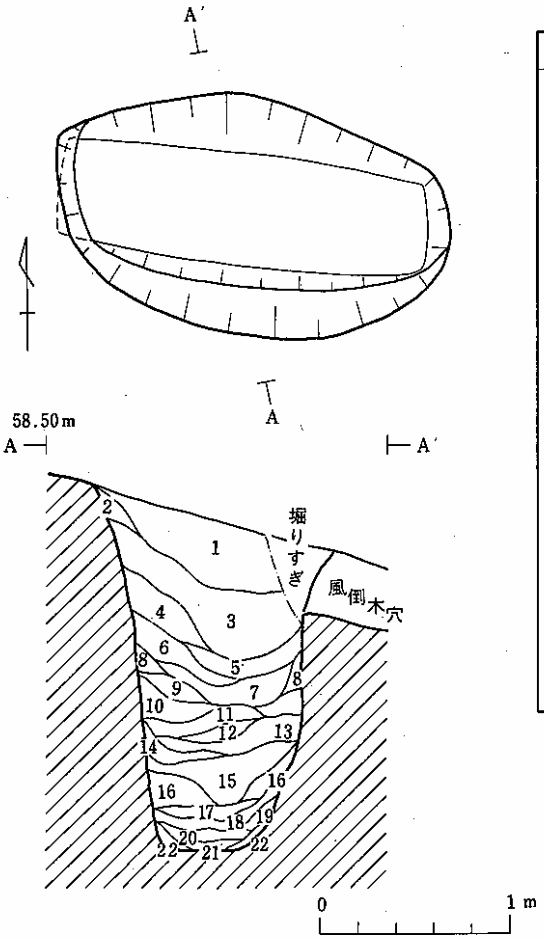
出土遺物はほとんどなく、縄文土器、土師器、須恵器、近世以降の陶磁器の小片が数片見つかっただけである。

１．土壙

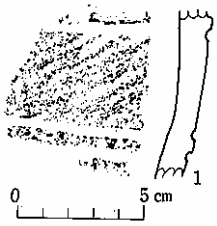
K～N－40～49区において土壙７基が検出された。遺構確認面はすべて地山上面である。これらの土壙については、一覧表に記した（第４表）。この中で、年代・性格が確定できるのは土壙１だけである。

土壙１（第20図）

K、L－40区で検出され、北東部分で風倒木穴を切っている。長軸2.1m、短軸1.3mの楕円



No.	土色	土性	備考
1	黒色土 10YR$^{2}/_{1}$	シルト	
2	黒褐色土 10YR$^{3}/_{1}$	シルト	
3	黒褐色土 10YR$^{2}/_{2}$	砂質シルト	
4	明黄褐色 2.5Y$^{6}/_{8}$	クレイ	シルト混入
5	黒褐色 10YR$^{2}/_{2}$	砂質シルト	
6	明黄褐色 2.5Y$^{6}/_{8}$	クレイ	シルト混入
7	黒褐色 10YR$^{2}/_{1}$	砂質シルト	
8	明黄褐色 2.5Y$^{6}/_{8}$	クレイ	シルト混入
9	明黄褐色 2.5Y$^{6}/_{8}$	クレイ	
10	黒褐色 10YR$^{2}/_{3}$	砂質シルト	ロームを混入
11	明黄褐色 2.5Y$^{6}/_{8}$	クレイ	
12	黒褐色 10YR$^{2}/_{3}$	砂質シルト	ロームを混入
13	明黄褐色 2.5Y$^{6}/_{8}$	クレイ	
14	明黄褐色 2.5Y$^{6}/_{8}$	クレイ	シルト混入
15	黒褐色 10YR$^{2}/_{2}$	砂質シルト	
16	明黄褐色 2.5Y$^{6}/_{8}$	クレイ	
17	黒褐色 10YR$^{2}/_{3}$	砂質シルト	ロームを混入
18	明黄褐色 2.5Y$^{6}/_{8}$	クレイ	
19	明黄褐色 2.5Y$^{6}/_{8}$	クレイ	シルトを混入
20	黒褐色 10YR$^{2}/_{3}$	砂質シルト	
21	明黄褐色 2.5Y$^{6}/_{8}$	クレイ	
22	黒褐色 10YR$^{2}/_{3}$	砂質シルト	ロームを混入



第20図　土壙１と出土遺物　　第20図の２

形を呈し、長軸方向はN－80°－Wである。深さは約1.9mである。堆積土は22層に細分され、自然堆積を示している。壁は、急な角度で立ち上がり、西壁が内傾している。底面は平坦で長方形を呈している。遺物として深鉢（大木８ｂ式）の破片一片（第20図の２）が堆積土下層から出土している。いわゆる落し穴と推定される。

２．溝状遺構

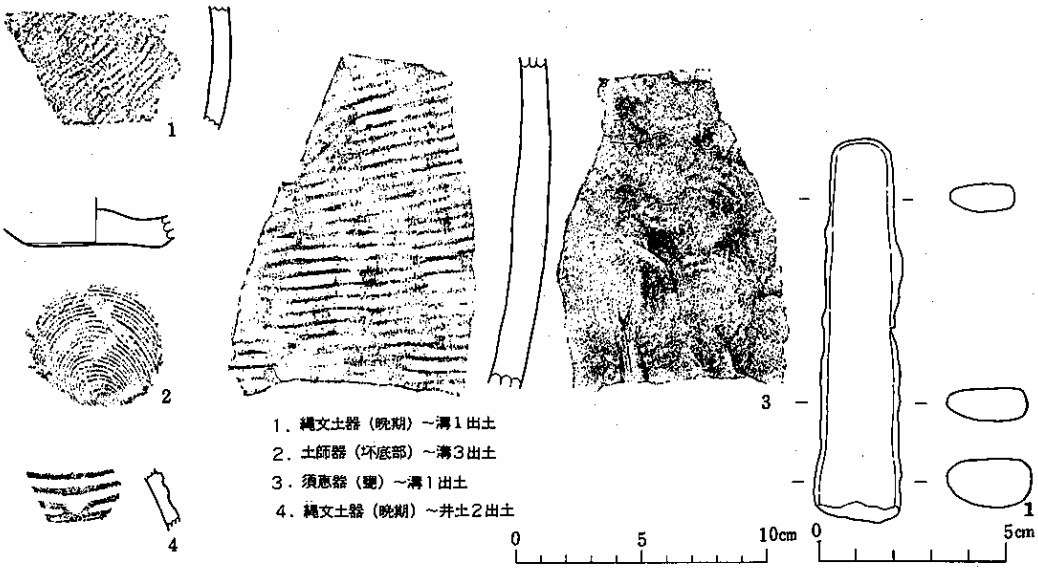
K～N－43～49区で溝状遺構3条が検出された。遺構確認面はすべて地山上面である。これらについては一覧表に記した（第５表）。

第４表　土壙一覧表

番号	位置（区）	重複関係	平面形	大きさ(m)	深さ(m)	長軸方向	底面の状況	壁の立ち上がり	出土遺物	備考
1	K、L－40	風倒木穴を切っている。	楕円形	2.1×1.3	1.9	N－80°－W	平坦	急角度	土器片（大木８ｂ）	落し穴
2	K－44	井土２に切られている。	長方形	1.2×0.5	1.0	N－90°－W	平坦	急角度		Tピット
3	L－42、43	井土１に切られている。	長方形	2.0×1.1	0.5	N－24°－W	二箇所の凸部がある。	急角度		
4	M－43、44	なし	不整方形	1.7×0.9	0.6	N－26°－W	北端にテラスがある。	ゆるやか		
5	K－46	溝３に切られている。	長方形	0.7×0.4	0.4	N－76°－W	平坦	急角度		
6	L－47	なし	長方形	1.8×0.6	0.3	N－8°－W	平坦	急角度		
7	L－48、49	なし	長方長	2.1×1.0	0.9	N－35°－W	平坦	ゆるやか		

第５表　溝一覧表

番号	位置（区）	重複関係	方向	上端幅(cm)	下端幅(cm)	深さ(cm)	底面の状況	壁の立ち上がり	出土遺物	備考
1	M－44、45	なし	N－26°－W	30～50	20～14	7～14	平坦	ゆるやか	縄文土器（晩期）須恵器	
2	L～N－43～45	井土１、井土２と切り合っている。	N－28°－W～N－86°－W	40～60	20～20	7～20	平坦	ゆるやか	小刀（中子）	
3	K－44～49	土壙５を切っている。	N－1°－E	70～170	20～90	7～90	平坦	ゆるやか	土師器（杯底部）	



第21図　北区出土遺物　　第21図の２(溝２出土小刀)

３．井土跡

Ｌ～Ｎ－43～44区において井戸跡２基が検出された。遺構確認面は、地山上面である。井戸１は、土壙３および溝２と重複関係にあり、土壙３を切っているが溝２との新旧関係は不明である。平面形は不整円形で、径約１㎜、深さ約1.5㎜である。堆積土は、黒褐色（7.5ＹＲ$^{2}/_{2}$）のシルトで構成されている。井戸２は、土壙２、溝２と重複関係にあり、土壙２を切っているが、溝２との新旧関係は不明である。平面形は円形で、径約1.5㎜、深さ約2.5㎜である。堆積土は、黒褐色（7.5ＹＲ$^{2}/_{2}$）のシルトで、多量の河原石が投げ込まれていた。二基とも素堀りの井戸で、断面形は、下半部が円筒形を呈し、上半部が擂鉢状に開いている。底面はいずれも平坦である。遺物は、井戸1から近世以降のものと思われる擂鉢の破片一片、井戸２から、縄文時代晩期の土器片一片が出土している。

Ⅴ．考　　察

１．遺物包含層について

南区で検出された縄文土器を含む黒褐色の土層については、①各層が均一な分布を示していたこと。②Ⅱ層以下の土層が安定していたこと。③出土した土器がすべて縄文時代早期後葉のものであったことの三点から遺物包含層として扱った。しかし、後述するように、早期後葉において年代差が認められている野島式、鵜ヶ島台式、素山Ⅱａ式、素山Ⅱｂ式、上川名Ⅰ式、梨木畑式、船入島下層式の各土器が層位的に分離できなかったこと、同一個体でありながら地区、層位を異にする土器が少なくなかったことなどから、遺物包含層が再堆積したものである可能性が指摘できる。

２．遺物包含層出土の遺物について

（1）土器

遺物包含層出土の土器は、以下のように分類された（第６表）。各類土器は縄文時代早期後葉に位置づけられる。

第６表　遺物包含層出土土器分類表

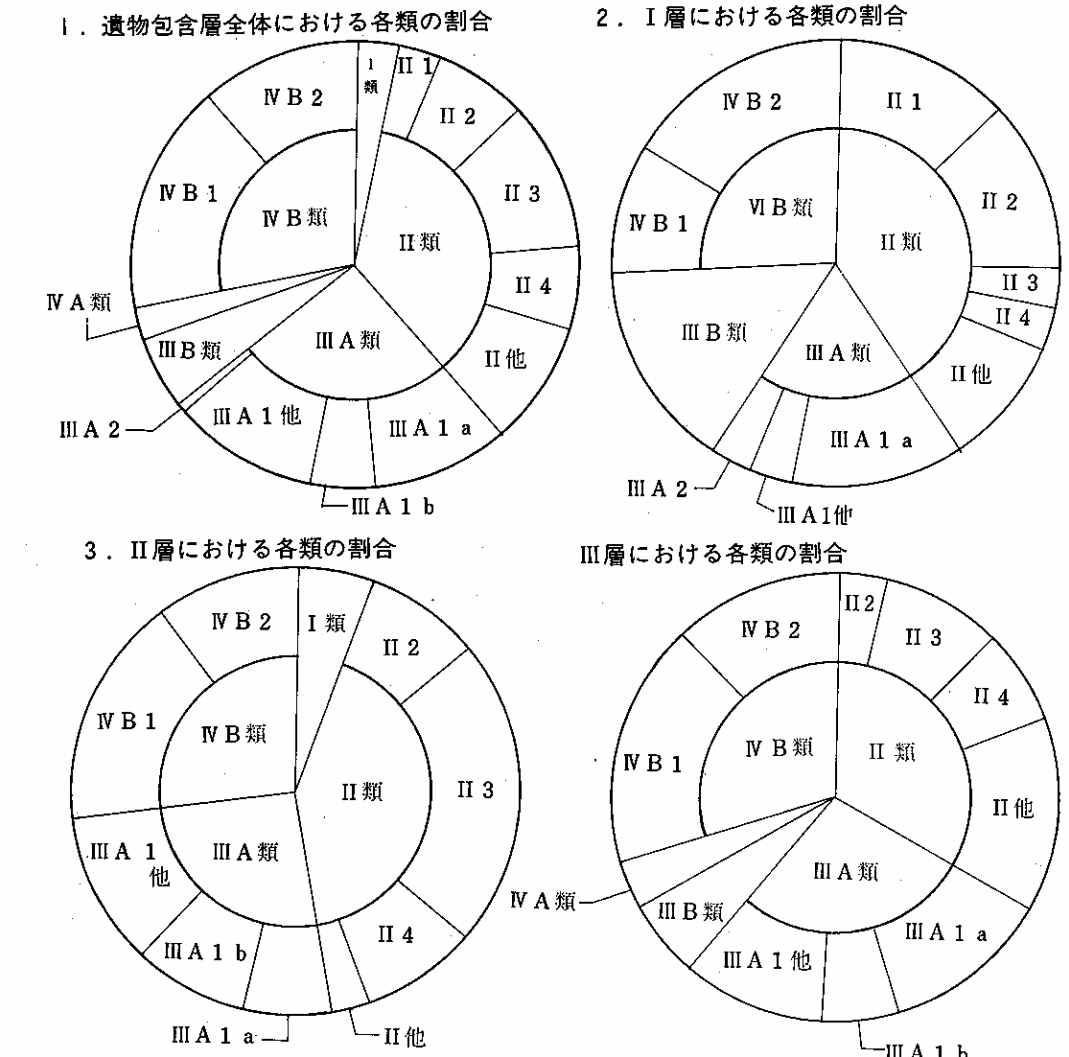
Ⅰ　貝殻沈線文土器		
Ⅱ　条痕文土器		
	1 貝殻腹縁刺突文	
	2 沈　線　文	
	3 刺　突　文	
	4 沈線文＋刺突文	
Ⅲ　縄文条痕土器		
Ａ．外面～条痕＋縄文、内面～条痕	1 縄　文	a
		b
	2 撚糸文	
Ｂ．外面～条痕＋縄文、内面～条痕＋縄文		
Ⅳ　縄 文 土 器		
Ａ．外面～縄文、内面～縄文		
Ｂ．外面～縄文、内面～無文	1 縄　文	
	2 撚糸文	

第Ⅰ類は、いわゆる貝殻沈線文土器である。胎土に繊維を含まず、貝殻腹縁刺突文や絡条体圧痕文が施される土器は大寺上層式（興野：1970）に類例が見られる。

第Ⅱ類は、いわゆる条痕文土器である。文様要素およびその施文技法等によって１～４に細別された。貝殻の腹縁や竹管による刺突文が施されるⅡ１類、Ⅱ３類は素山Ⅱａ式（林：1965）に比定できる。一方、Ⅱ２類のように太形の沈線文を有するものは、関東の野島式（赤星：1948）に類例が見られる。またⅡ４類のように、沈線や細隆起線による区画の中に刺突文が充填されるものは、同じく鵜ヶ島台式（岡本：1961）に類例が見られる。

第Ⅱ類は、いわゆる縄文条痕土器である。土器外面には縄文、条痕文が施されるが、内面に条痕文のみ有するものをⅢA類、縄文および条痕文を有するものをⅢB類とした。

ⅢA類のうち、外面に斜縄文が施されるものをⅢA１類、撚糸文が施されるものをⅢA２類



第22図　遺物包含層における土器の出土状況

とし、さらにⅢA１類を口縁部文様帯文様の違いによってａ、ｂに細別した。

ⅢA１ａ類は、条痕文の施された口縁部文様帯が、撚糸圧痕や絡条体圧痕の施された隆帯によって区切られる縄文条痕土器で、素山Ⅱｂ式（林：1965）に比定できる。また、隆帯がなく口縁部文様帯に撚糸圧痕が施されるもの（第８図80～83）や口縁部に隆帯があるもの（第５図３）も見られた。

ⅢA１ｂ類は、口縁部まで縄文が施される土器で、上川名Ⅰ式（加藤：1951）に比定される。

ⅢA２類は、外面に撚糸文、内面に条痕文が施される土器で、字賀崎貝塚出土AⅢ類土器（宮教委：1980）に類別が見られる。

ⅢB類は、土器内面まで縄文がおよぶ土器で、「口縁部文様帯と体部の境に隆帯のあるもの」（林：1965）は上川名Ⅰ式、隆帯がないものは梨木畑式（林：1965）に比定されるが、土器片の部位によって隆帯の有無が不明なものが多い。

第Ⅳ類は、縄文が施され、条痕文が見られない土器である。土器内面に縄文が施されるものをⅣA類、内面が無文のものをⅣB類とした。

ⅣA類は、口縁部文様帯と体部の境に隆帯はなく、土器内外面に縄文が施されるもので、梨木畑式に比定できるが、羽状縄文を持つ土器（第10図119）も見られる。

ⅣB類は、内面が無文の土器で、外面に縄文が施されるものをⅣB１類、撚糸文が施されるものをⅣB２類とした。ⅣB１類には羽状縄文が見られ、船入島下層式（伊東：1957）に比定できる。そしてⅣB２類はそれに伴出する「撚糸文の施された焼成不良の土器」（林：1955）である。

以上述べた各類土器は、遺物包含層の各層からほぼ同じ割合で出土しており、層位的に分離することはできなかった（第22図）。

（２）石器

石器はすべて遺物包含層から出土している。剥片石器、礫石器の他に、大小のフレイクも多く見られた。

剥片石器の中では石箆が最も多く、約３分の１を占める。礫石器では磨石、敲石が多い。

このような石器の組成を示す遺跡として、山形県の石田遺跡（西川町教委：1981）、青森県の螢沢遺跡（塩谷：1979）などがあり、いずれも縄文時代早期の土器と共出している。

Ⅵ. ま　と　め

1．天神山遺跡は、蛭沢川の右岸、玉造丘陵の丘陵端の一画に位置する。

2．発見された遺構としては、小竪穴遺構１基、土壙７基、溝状遺構４条、井戸跡２基、整地層がある。

3．発見された遺物としては、縄文時代の土器、石器、平安時代の土師器、須恵器、近世以降のものと思われる笄などがある。この中で、縄文時代早期後葉に位置づけられる土器、石器が大部分を占める。

4．遺構の年代は、小竪穴遺構、土壙１が縄文時代、溝状遺構、井戸跡、整地層は近世以降と考えられるが、他の遺構に関しては不明である。

5．調査の結果、中世と考えられる遺構、遺物の検出はなく、調査前の観察で認められた段状の地形や平坦面は、表土剥離後の状況では、部分的に沢状を呈したりする自然傾斜面に、植林等により手を加えたものであることがわかった。したがって、中世城館の存在については何ら資料は得ることはできなかった。

〔引用・参考文献〕

青森県教育委員会（1980）「長七谷地貝塚」青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第57集

〃　（1981）「鷹架遺跡発掘調査報告書」青森県埋蔵文化財調査報告書第63集

赤星直忠（1948）「神奈川県野島貝塚」『考古学集刊』第１巻

新井和之（1978）「千葉県佐倉市上座貝塚出土土器群について」『奈和』第16号

伊東信雄（1940）「宮城県遠田郡不動堂村素山貝塚調査報告」東北帝国大学法文学部奥羽史料調査部研究報告第２

〃　（1957）「古代史」『宮城県史』第１巻

岩出山町（1970）「岩出山町史」上巻

岡本　勇（1961）「三浦市鵜ヶ島台遺跡」横須賀市市立博物館研究報告（人文科学）５

加島　進（1974）「刀装具」『日本の美術』第64号　至文堂

加藤　孝（1951）「宮城県上川名貝塚の研究」宮城学院女子大学研究論文集Ⅰ

興野義一（1970）「宮城県大寺遺跡出土の早期縄文土器」古代文化第22巻第11号

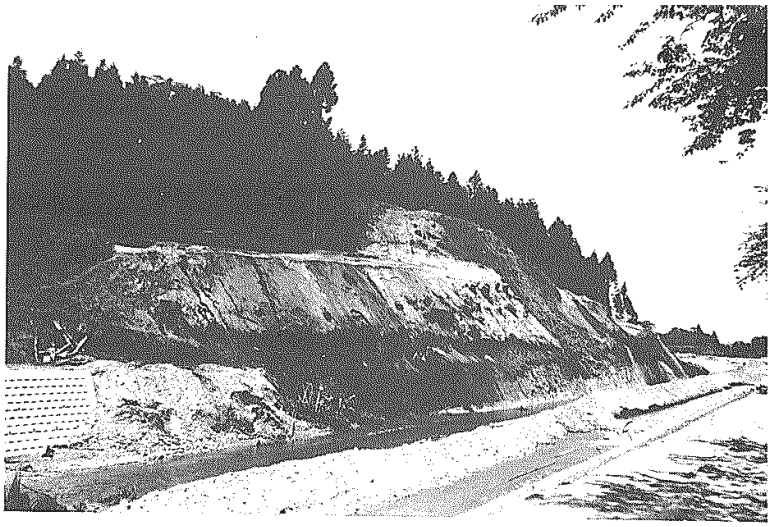
興野義一・遠藤智一（1970）「宮城県玉造郡岩出山町の考古学遺跡」『岩出山町史』下巻

小牛田町教育委員会（1976）「山前遺跡」

後藤勝彦（1968）「宮城県七ヶ浜町吉田貝塚〔Ⅰ〕」『仙台湾周辺の考古学的研究』宮城教育大

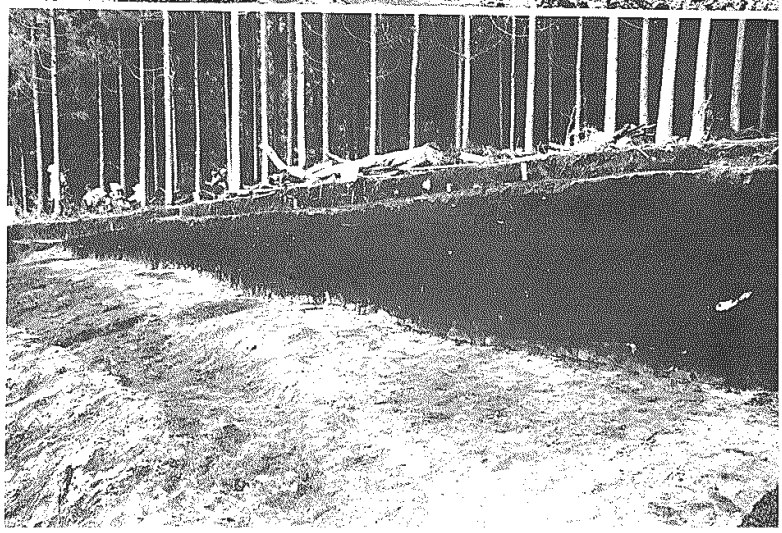
学歴史研究会編
笹野大行（1977）「刀装具の起源」日貿出版社
塩谷隆正（1979）「螢沢遺跡」青森市螢沢遺跡発掘調査団
紫桃正隆（1973）「仙台領内古城・館」第三巻　宝文堂
柴田町教育委員会（1974）「遺跡と遺物」『柴田町の文化財』第５集
白石市（1976）「白石市史」別巻（考古資料編）
関野哲夫（1980）「鵜ヶ島台式土器細分への覚書」『古代探叢』－滝口宏先生古稀記念考古学論集－早稲田大学出版部
芹沢長介・林謙作（1965）「岩手県蛇王洞洞穴」石器時代７
角田文衛（1936）「陸前船入島貝塚の研究」考古学論叢３
鳴瀬町教育委員会（1977）「亀岡遺跡・金山貝塚」宮城県鳴瀬町文化財調査報告第１集
西川町教育委員会（1981）「石田遺跡発掘調査報告書」山形県西村山郡西川町埋蔵文化財発掘調査報告書第３集
林　謙作（1965）「縄文文化の発展と地域性－東北－」『日本の考古学Ⅱ』河出書房
〃　（1982）「縄文早・前期の土器－北海道南部、東北地方－」『縄文土器大成』第１巻講談社
藤村新一（1981）「宮城県の旧石器時代遺跡地名表」『旧石器時代の東北』東北歴史資料館
宮城県教育委員会（1980）「宇賀崎貝塚」宮城県文化財調査報告書第67集
〃　（1980）「混内山遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ』宮城県文化財調査報告書第71集
〃　（1980）「湯ノ倉遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ』宮城県文化財調査報告書第71集
〃　（1981）「宮城県遺跡地名表」宮城県文化財調査報告書第73集
〃　（1981）「宮城県遺跡地図」宮城県文化財調査報告書第74集
山内清男（1929）「関東北における繊維土器」史前学雑誌第１巻第２号
〃　（1930）「斜行縄文に関する二、三の観察」史前学雑誌第２巻第３号
〃　（1979）「日本先史土器の縄文」先史考古学会

図版１－１
調査区近景
（南区）

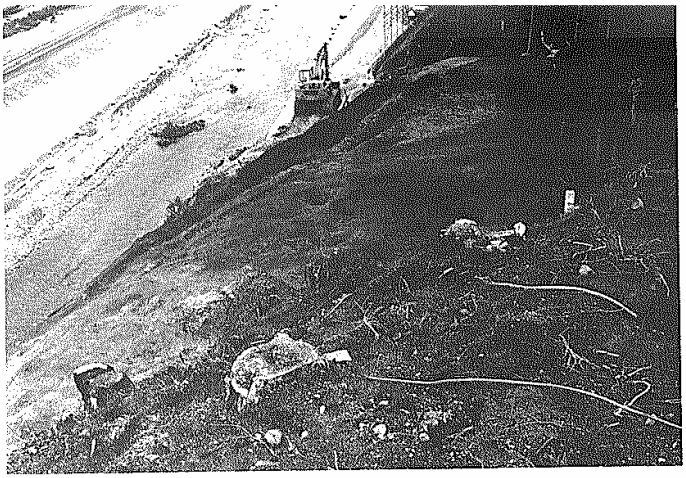


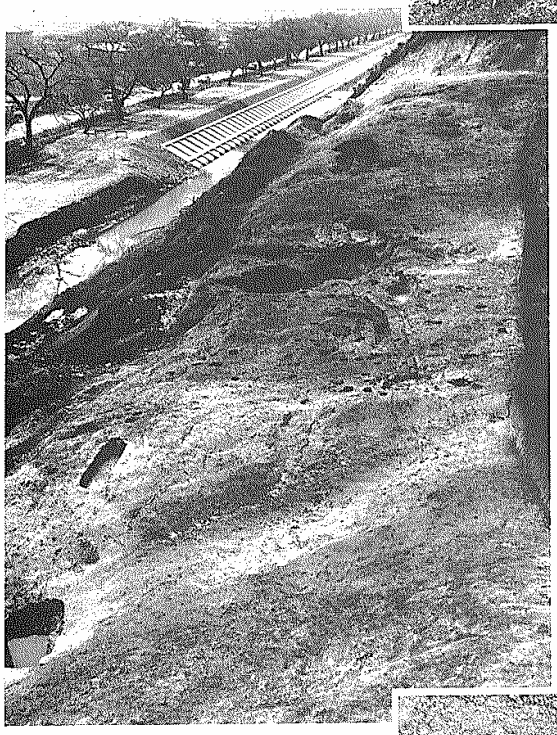
図版１－２
調査区近景
（北区）

図版１－３
南区遺物包含層
断面図
（Ｊ－18、19、20区）



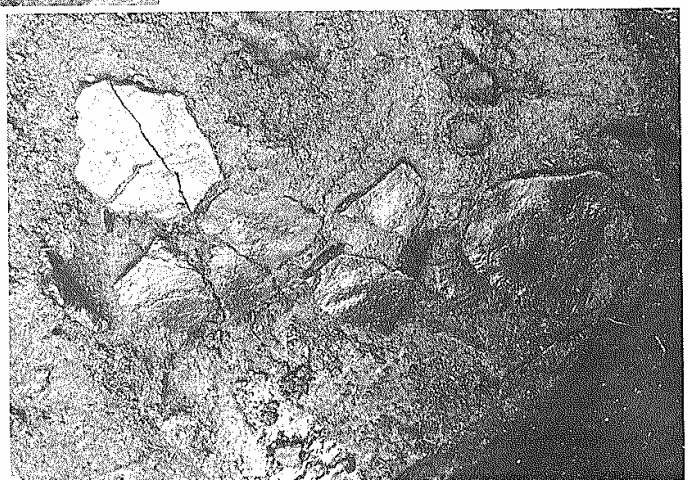
図版２－１
南 区 全 景





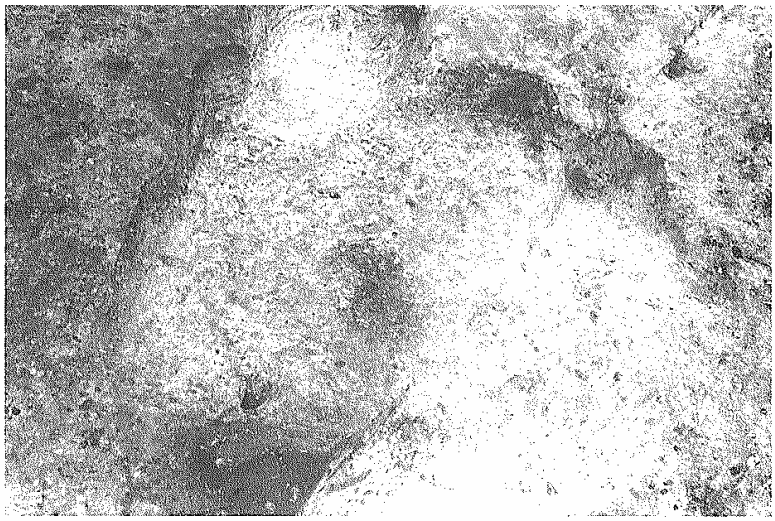
図版２－２
北 区 全 景

図版２－３
遺物出土状況
（Ｋ－20区 遺物包含層
第Ⅲ層）



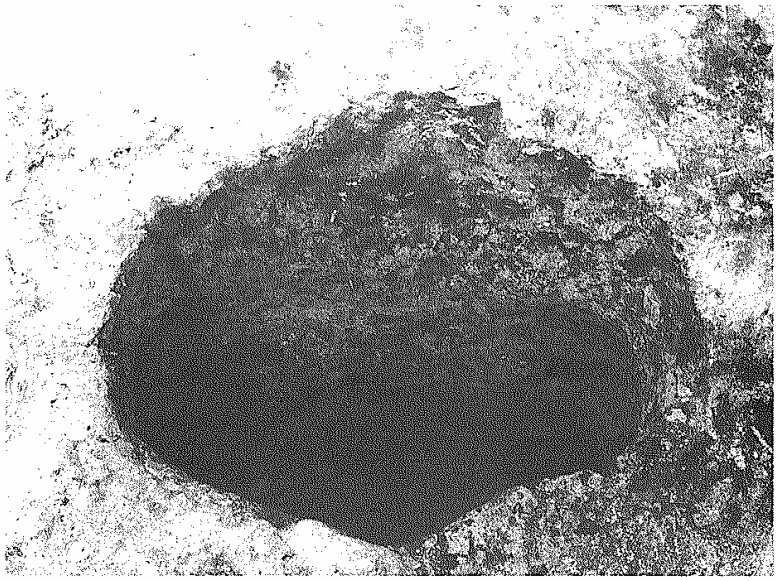
図版３－１

南　区
小竪穴遺構

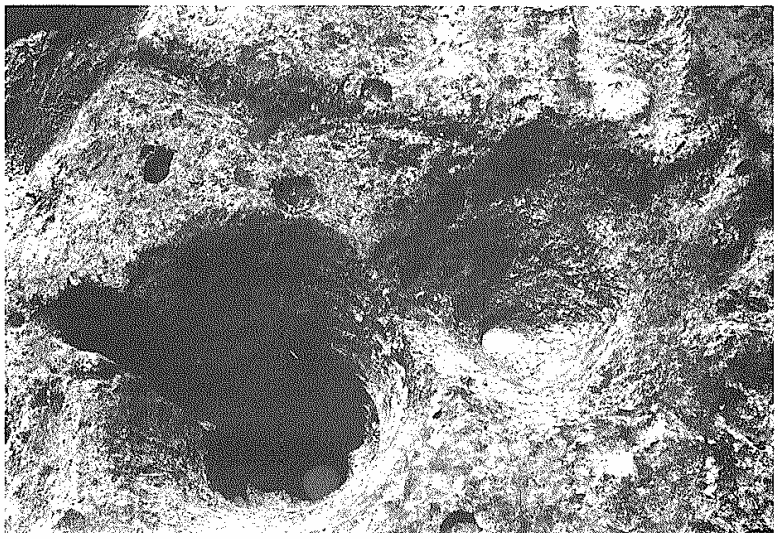


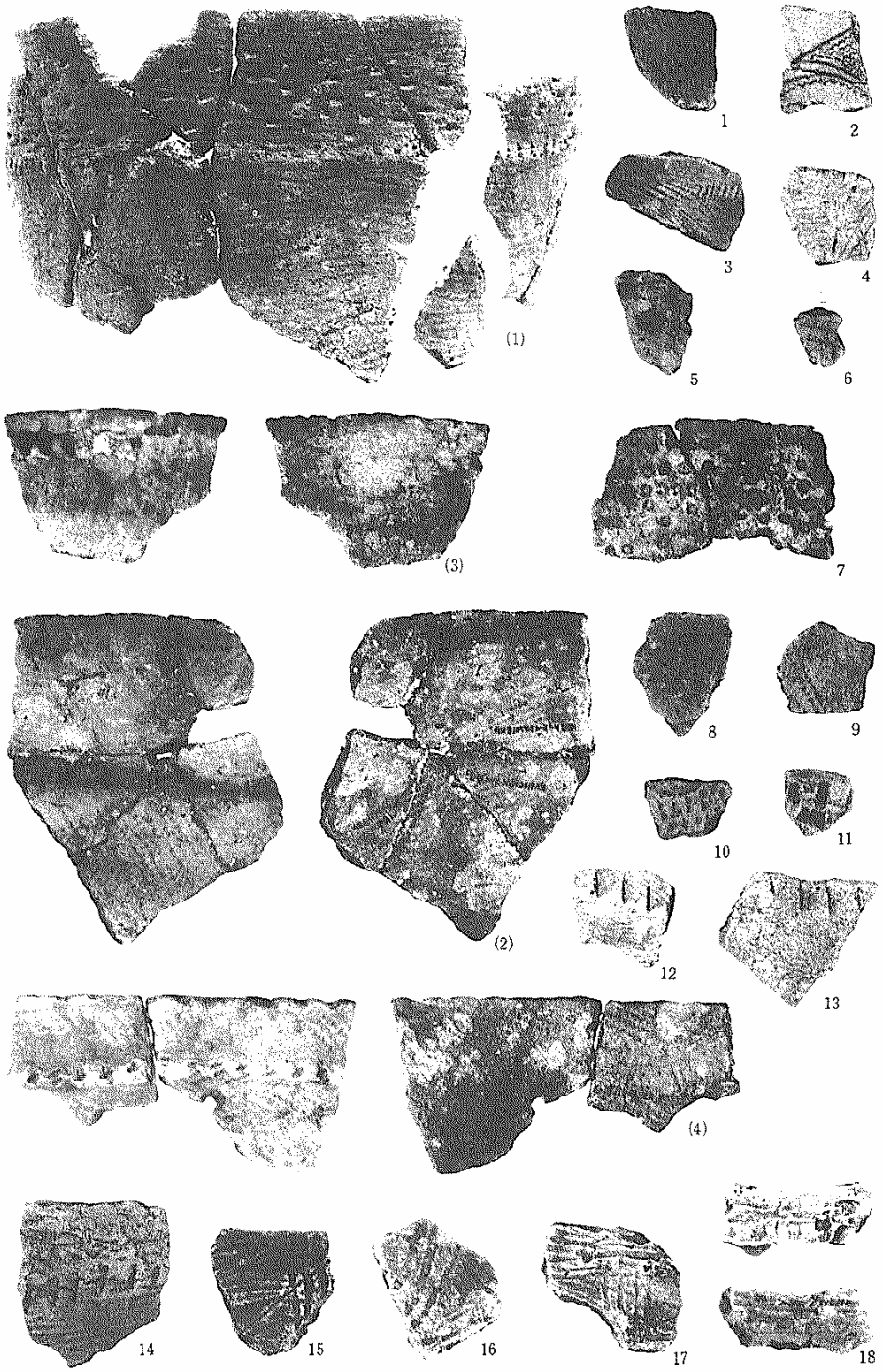
図版３－２

北区土壙１

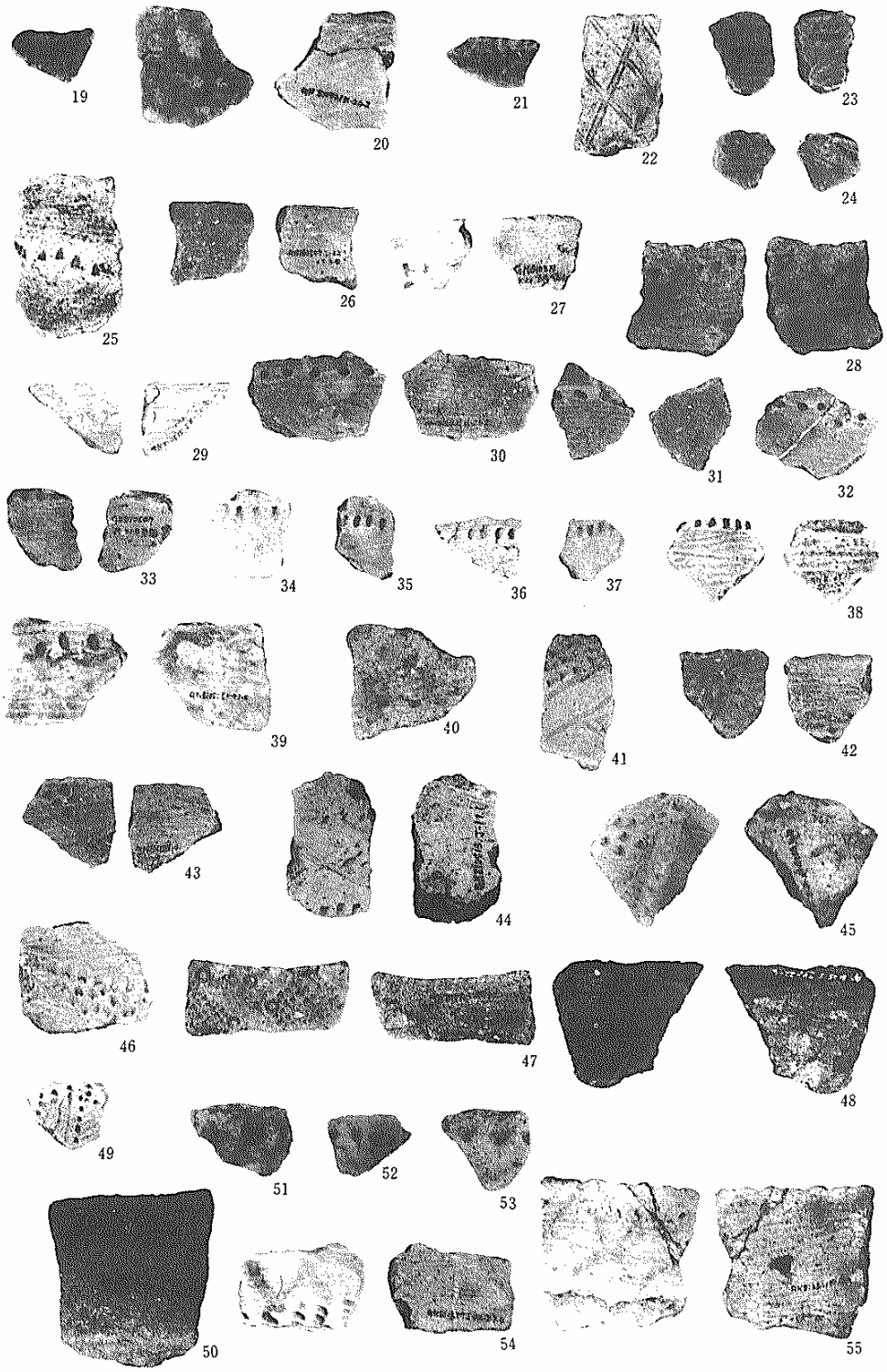


北　区
井土１(右)
井土２(左)

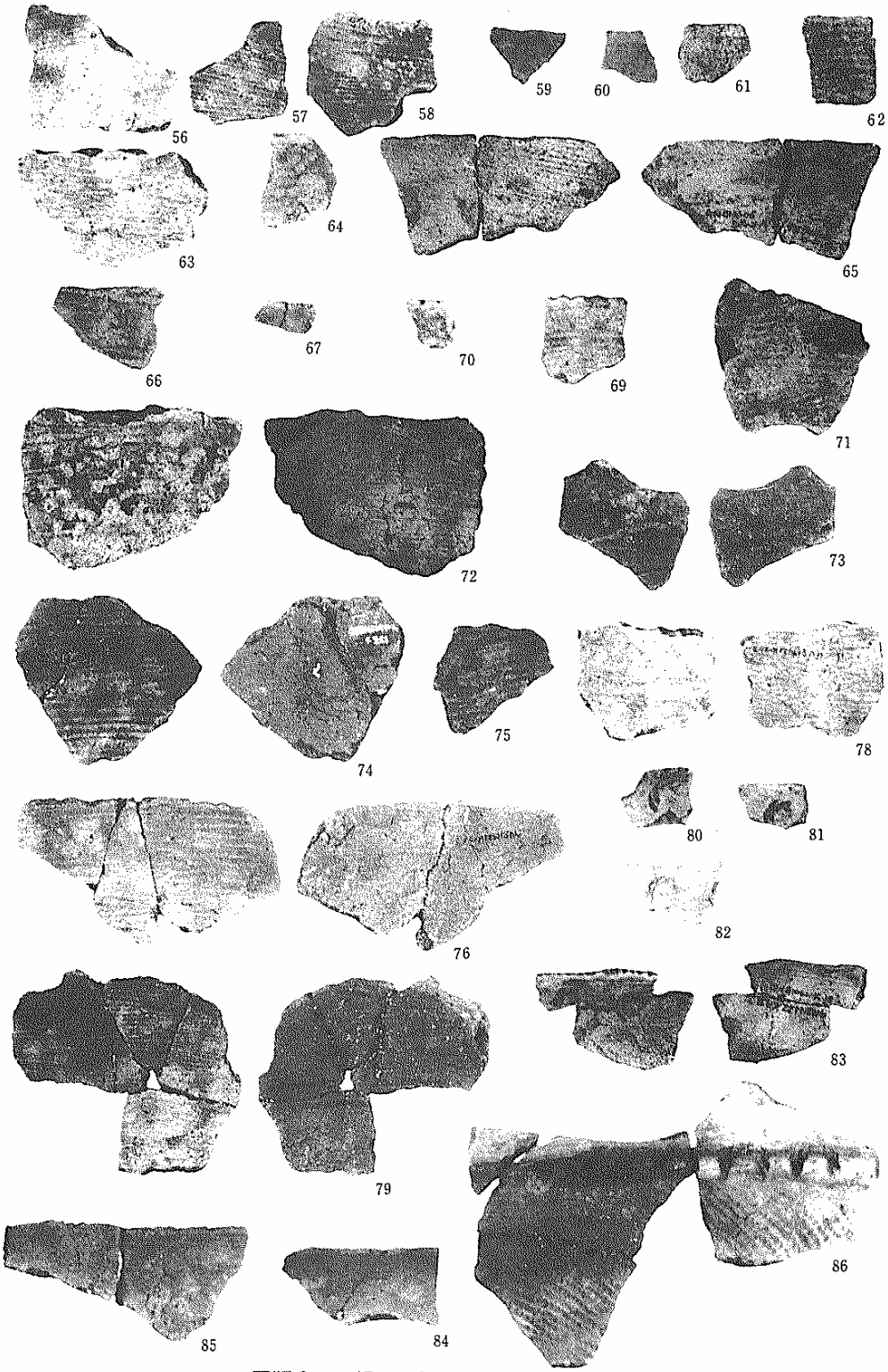




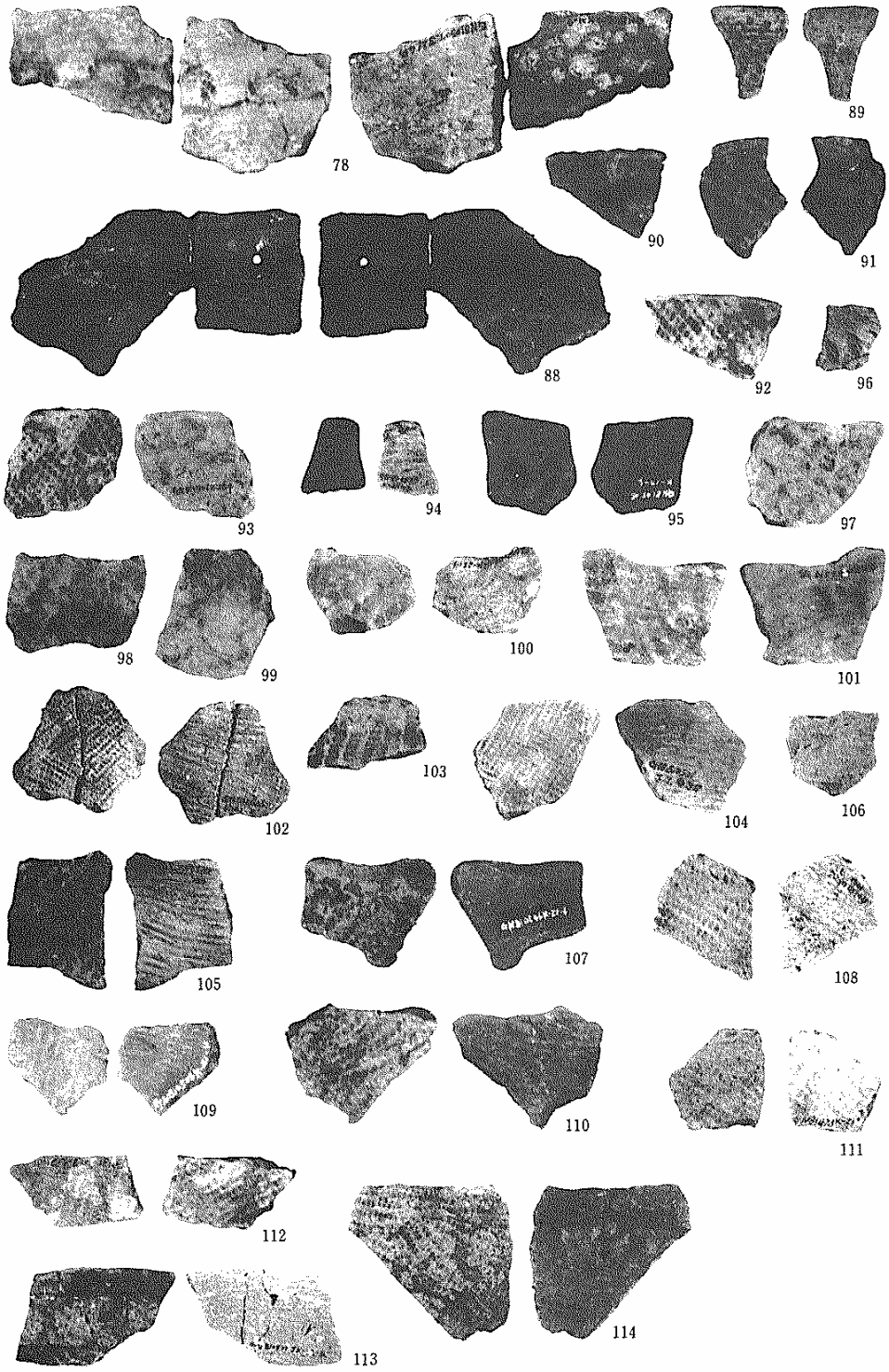
図版４　縄文土器　実測土器(1)～(4)、拓本土器１～18



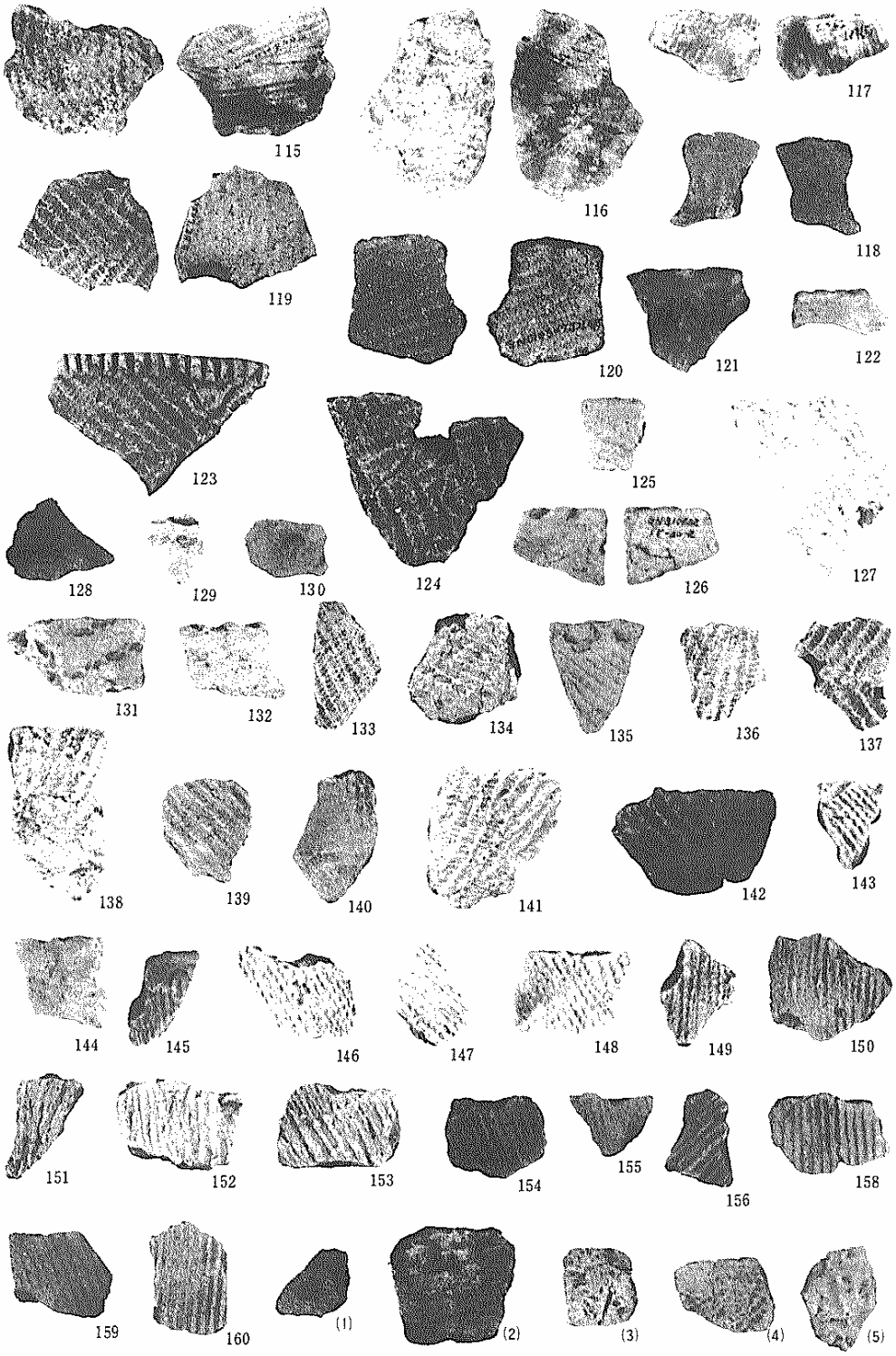
図版５　縄文土器　　拓本土器19～57



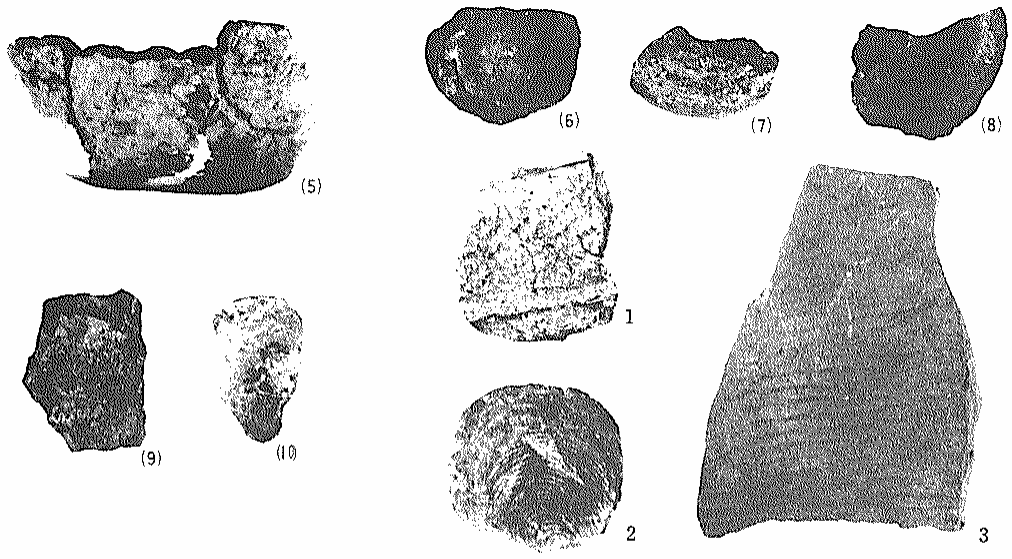
図版６　縄文土器　拓本土器58～86



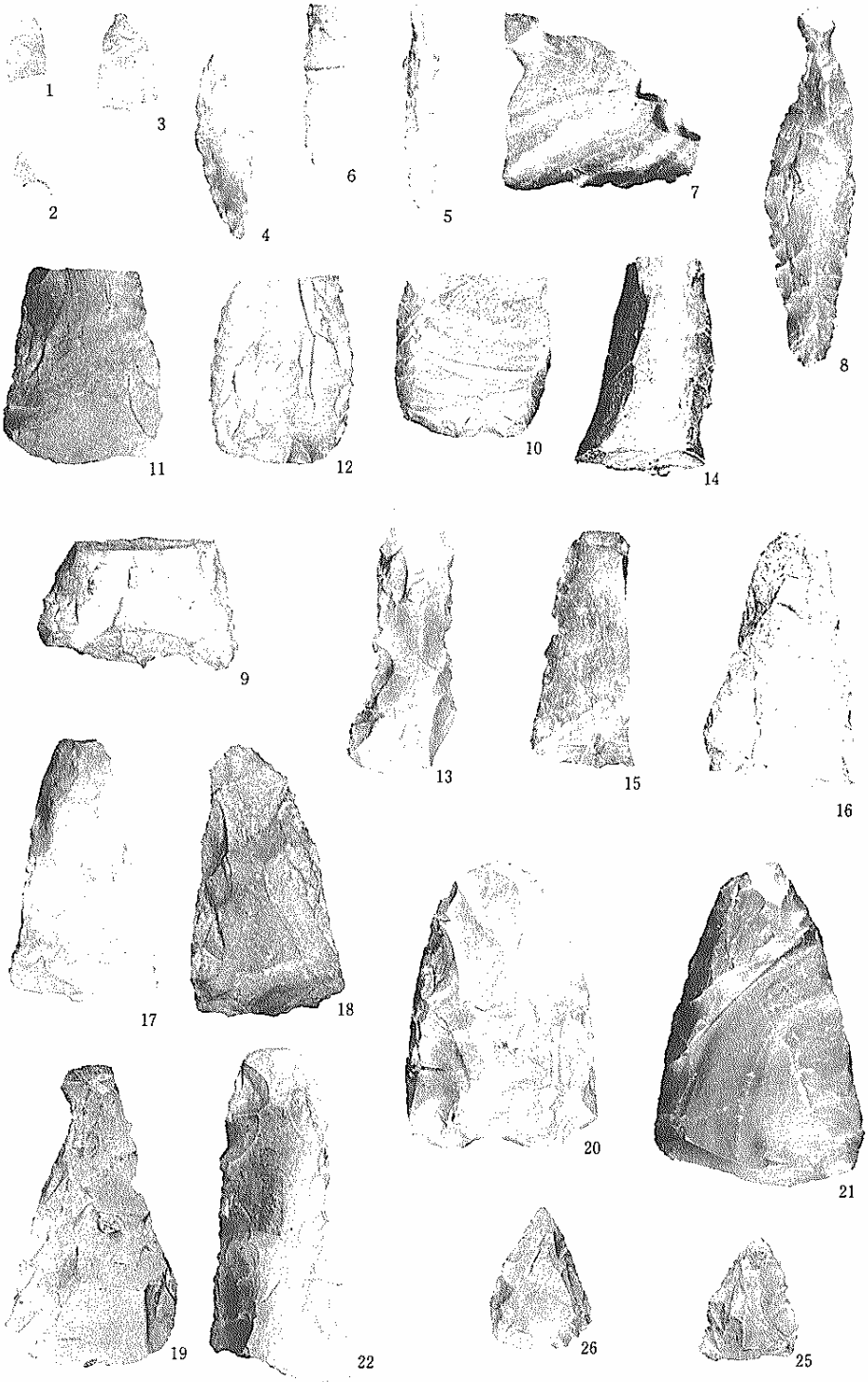
図版７　縄文土器　拓本土器78～ 114



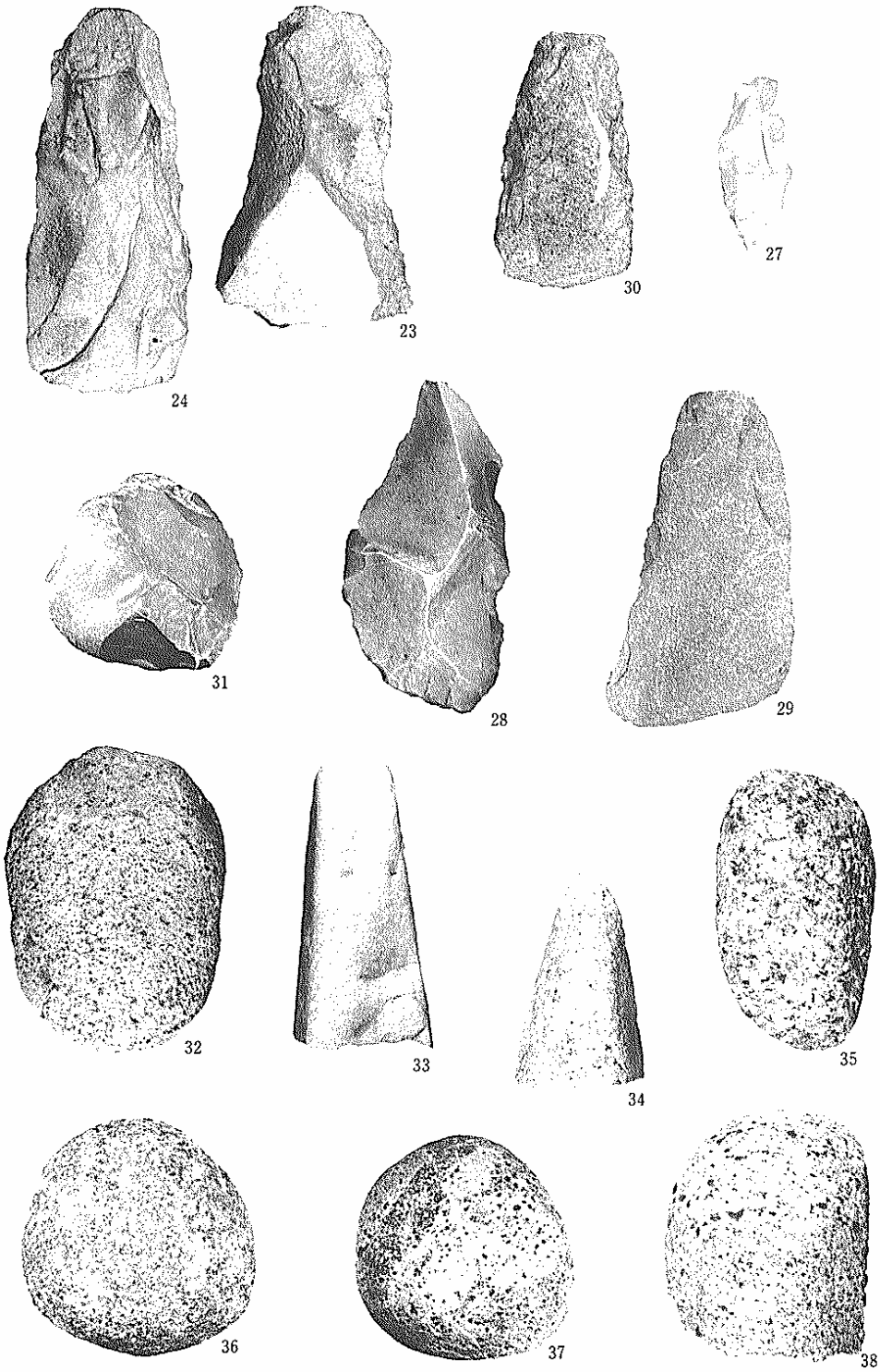
図版８　縄文土器　拓本土器 115～160　小堅穴出土土器(1)～(5)



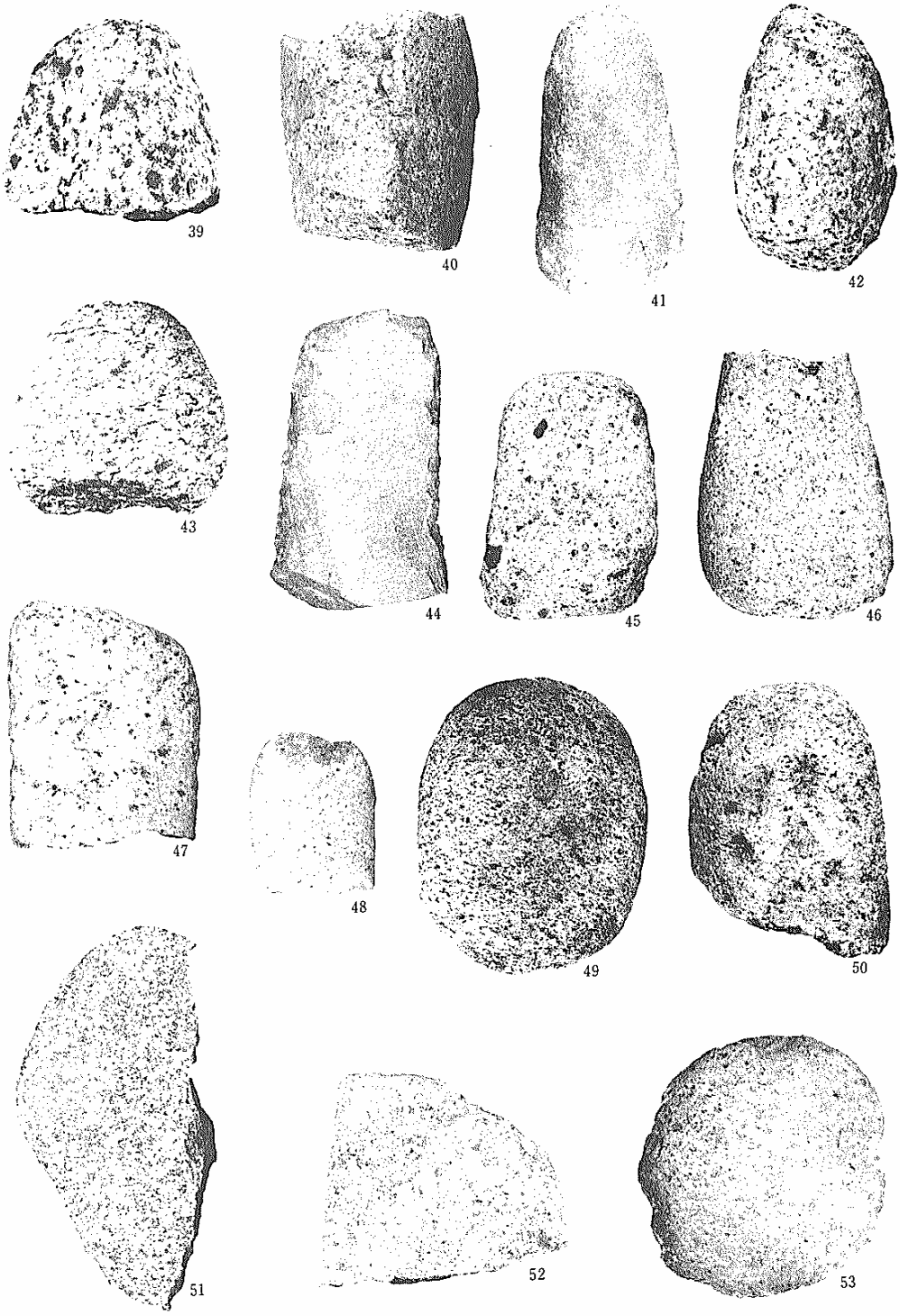
図版９　　縄文土器、土師器、須恵器
(5)～(10)実測土器（底部）
１．北区土壙１出土縄文土器
２．溝３出土　土師器坏底部
３．溝１出土　須恵器甕



図版10　石　　器



図版11　石　　器

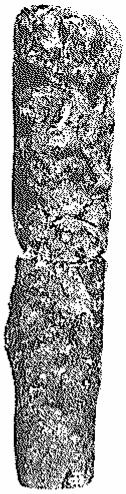


図版12　石　　器

1

2

4



5

3

1．斧（胴部拡大）
2．斧
3．洪武通宝
4．刀　　子
5．小刀

図版13　金 属 製 品